
arme

ふあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

arme

【Zコード】

Z2545C

【作者名】

ふあ

【あらすじ】

六十年目を迎えた世界大戦のさなか。その国の誇る、ロボット工学の粋を集めて造られた人型戦闘ロボット、通称arme。冷たい雨の中、生み出されるのは喪失と絶望。それぞれの悲しみ。届かない叫び。その声を聞く者はいなかつた。その涙に触れる者は、いなかつた。

暗闇の中に見える光の筋。

休みなく伝わり続ける小さな振動。

誰一人言葉を発しないトラックの荷台。
石を踏み潰し跳ね上がる車体。
かすかな砂のにおい。

舗装されていない乾いた地面。

地面を走り続けるトラック。

トラックの両側にある廃墟。

廃墟の向こうにある、夕陽。

た。

その廃墟となつた地に降り立つた彼は、車体の影が遠ざかると同時に、建物の立ち並ぶ場所へと走りこむ。身体を伏せる様に曲げて、それでいて全力で走る様子は街中ではいささか怪しまれるものだが、この地を背景にするとあまりにも彼の姿は似合にすぎていた。

国軍正規の紺色の軍服を着て、両手に固く長銃を握り、テンポを崩さずに走り続ける。ヘルメットの下で前を睨みつけるその表情はまだ若い。

国境の地としてそれなりににぎわっていたこの街も、数年前に襲撃されて以来造り直されることはなく、廃屋が立ち並び野犬がうろつく場所となつた。崩れた家屋の瓦礫が散らばり、あたり一面遠慮なく散らばっている。壁の一部を破壊されて、それでも立つている

ビルやマンションだつた建物は、残された壁にいくつもの弾痕を抱えている。窓だつた部分には真っ暗な口がぽつかり開き、すでにガラスなど一枚も存在しない。通路だつた地面には、崩れた建物の壁などの瓦礫があちこちに突き刺さり、それ以外の細かいものが、通行の著しい邪魔をする。いくつかの車が、打ち捨てられ砂礫をかぶつていた。

街は、これほど荒れているにもかかわらず、不気味なほど静かだつた。猫一匹おらず、鳥の声すら聞こえない。

ようやく彼は足を止め、一つの廃ビルの壁に背をつけた。一度ゆっくりと息を吐き、夜が近づいているはずなのに尚も気温の低下を許さない夕陽を忌々しく思う。額から伝い下りた一滴の汗が、乾いた地面に小さな黒いシミをつくつた。息を吸い込むと同時に、後ろを振り向く。ちゃんとついてきている。ついてこないはずはないのだが、彼はもう一度安堵のため息をついた。

一つの光影が、隣にいる人物を見上げて直立している。その影は、隣に立つ軍服の兵士よりも更に若い、十代半ばほどの少年だつた。その見た目はとてもこの場に似つかわしくなく、長ズボンをはいているが、上は肘までの半袖でヘルメットすらしておらず、銃も持っていない。とても同じ場所にいるとは思えない二人だが、現実に、一メートルほど距離を置いただけの同じ場所にいるのだ。

「B - 6 ポイント、到着」

長銃を右手で持ち、無線機を左手で持つて呟く。それを胸ポケットに戻すと、別のポケットから取り出したインカムをつけた。右耳のほうにだけイヤホンがついており、そこから延びた針金入りの導線が首の後ろを廻つて口元まで続き、その先に小さなマイクがしている。止まつてからの動きは三十秒にも満たなかつたが、導線のゆがみを直し、まだスイッチも入れていないところに、無線機からの雑音が響いた。

その音はすぐに止んだ。後ろを振り向く。さつきと変わらない様子で、こちらを見上げる無気力な赤い瞳と目が合つた。

「いいか、生存者の発見と救出が目的だ。やられるなよ」

それだけ言って、壁の端で片膝を折つてしゃがんだ。砂を濃く含んだ風が顔に触れる。その上熱風だ、息苦しい。

次の瞬間、彼は壁の向こうへ身を乗り出し、同時に照準を合わせる。道の先、向こうにある建物の窓に見える一つの影と一つの銃口。灰色の軍服。敵だ。

側の地面が弾けた。それには目もくれず、

「行け！」

と叫ぶと同時に指に力を込めた。

近くを一つの影が駆けて行き、遠くの一つの影が、ぐずおれる。

両側を廃墟に挟まれた荒れ果てた通路を、足が許す限りの速さで、少年は走った。

銀色の髪を夕陽で赤く染め、赤い瞳でひたすら前を見つめる。数回、足元の土や瓦礫が鉛玉に貫かれて弾け跳んだが、走りぬく標的に当たられるほどの技術を持つ者はその場にはいないようだつた。数打てば当たると言うが、そう数を重ねる前に、彼は一つの建物の入り口を通過した。太陽の光が遮られ、一気に周囲は暗くなる。

その建物は、元はどこかの会社の事務所だったようで、そばにあら受付の台が崩れた天井に潰されている。

そこを少し速度を落として走りぬけ、奥にある階段を上る。一階へ到達し、更に三階へ続いているようだがそこで一度止まつた。その先にある廊下は静まり返り、両側に並ぶ部屋は扉が外れ、折れた机やガラスが夕陽に照らされて床に散らばつていた。廊下を突き当たりまで進んだが、だれもいないようだ。突き当たりにある階段は、踊り場から上の部分が、片側の壁や陥没した天井で潰れている。

しかし、通れないわけではない。コンクリートは今も十分その丈夫さを残しており、崩れることのなさそうな足場を選択し、その上を乗り越えた。普通に階段を上る一倍ほどの時間をかけて、最上階である三階の廊下にたどり着いた。

そこは階下よりもいくらかは片付いており、部屋のいくつかにはまだちゃんと扉がついていた。それでも、廊下にはガラスが飛び散り、開け放たれた部屋からは瓦礫や本などが流れ出ている。

廊下の長さは一階の半分ほどしかなく、突き当たりに扉のついた部屋が一つあつた。両サイドの部屋にはネズミ一匹おらず、必然的にその部屋にたどり着く。

取っ手を下げる押すと、簡単に開いた。鍵は壊れているようだつた。

狭い部屋の中には十代後半ほどの年の青年がいて、ものすごく驚いた顔をしたまま、手に持った拳銃を上げることもできずに振り向いた。服装や行動から見て、明らかに敵の兵士ではない。

「生存者一名、確認

「そう呟くと、

「よし、他にいるか?」

一番最後に聞いた人間の声で、返ってきた。それに対応する言葉を発しようとしたとき、

「誰だ、お前は」

いぐぶん平静さを取り戻したからなのか、相手が限りなく一般人に近いからか、自分より年下のようだと余裕が出来たからなのか、部屋の向こうに対峙している青年が口を開いた。下には向けているが、両手で銃を握り締めている。

少年は黙つて腕を上げ、服の右袖を見せた。群青色に緑色の刺繡は見えにくいく、大変評判は悪いのだが、幸いにも彼はこの意味を汲み取ってくれたようだ。

「軍部……軍のシンボルマーク」

嘘だろ?と青年が言つ前に聞いた。

「他に生存者は」

「え、いや……いない。ここにいるのは俺だけのはずだ
いない、という報告を受けて、

「そうか。なら、早く戻つて来い。死なすなよ」

と、またすぐに返事があった。了解、と返し、元の場所に戻るまでの最短距離を算出する。さつきの潰れた階段だと時間がかかる。それならば、青年の後ろ側の壁にあるドアを抜けた方が速いだろう。その先にも階段があるはずだ。

そう結果を出し、そのドアに触れ、かかっていた鍵を開ける。

「これから街を出るから付い……」

「付いてけばいいんだろ?」

青年はそう先に言つて、見下ろした。背は高い。180センチに

幾分足りない程。もしこれで軍服を着ていたら軍人だと言われても、あまり見た目に違和感はないだろう。ただ、明らかに不審そうな顔をしている。

「お前軍人なのか、嘘だろ？銃とかなんか持つてんのかよ」確かに疑われても仕方ないが、彼は素直に、ないと答えた。

呆れ果て、それ以上言葉が続かないようだった。軍部の刺繡の入った布は、例え非公式のルートを使つても、手に入れることは難しい。処分されるものでも、集めて軍部内で処理される。最も使われるルートは、戦場で戦死した兵士から奪うことだが、流石にそこまでする人は滅多にいない。青年が彼に持つほんの僅かな信用は、その刺繡のみである。

「ひとつだけ」

「何だよ」

「その銃は、撃たれても使うな」

そう言つと、呆れに、何か怒りのよつた感情が滲んだ。

「何言つてんだよ、勝手だろ。撃たれて撃ち返さねえなんてやられるに決まつてんだろ！」

そう怒鳴るがその勢いには全く動じず、自分が握っている銃の筒を少年が右手で握り締めるのを見て、畏怖と嘲笑を織り交ぜた声で、「何だよ、貸せつてか？」

そう聞くと、彼は首を横に振つた。

「壊す」

「ふざけんな！」

その手を振りほどき、明らかに敵意を持つて睨みつける。撃たれても使うなという意味が分からぬ。一体こいつはどういうつもりなんだ。やられつ放しじや死ぬに決まつてゐる。もう何から言えぱいのか分からぬので、青年は黙つて睨みつけた。

このままこいつしていても仕方がない、と少年は考えた。無理矢理奪い取つて窓から投げ捨ててもいいが、そなるまでが非常に危険だ。ものすごく抵抗するだろう。それに、あと数十分で陽が暮れる。

夜の方が昼間よりも人にとって行動しづらいのは間違いない。

何より、ここから早くでたほうがいいと少年は判断した。

もう一度約束させようとするが、やはり無理だった。時間が無駄になり、敵意が増すだけだった。

開けられた扉の向こうは割と広い空間で、たくさんの机が並んでいる。昔はここでさまざまな人が仕事をしていたのだろうが、今はその机は碎かれ、蛍光灯の破片が飛び散り、足跡のついた書類があちこちに飛び散らかっている。

いくらか暗さが増したが、相変わらずの静けさだ。こんなに人のいるべき席はあるのに、肝心の人間が、いない。

幸いその先の階段は崩れることなく残つており、一階までたどり着いた。そこから、入ってきた出入り口へ出ることは出来るのだが、陽が暮れかかった正面の大通りを通るより、裏口を使った方が安全だろう。この建物の外を通りたとき、側面にもう一つの扉があつたのを視認していた。

階段脇の分厚い扉をゆっくりと開ける。この部屋の先に裏口は位置しているはずである。

閉まりかけた扉が鉛玉をはね返し、澄んだ金属の音が響いた。

次の瞬間、その音がいくつも連なり、静かな虚空に広がつていった。

すぐさま床に伏せ、最も近くにある机の影に一人は座り込んだ。金属の音はすぐに止み、再び静けさが辺りに充満した。弾が飛んできた位置からして、相手がいるのは一列に向かい合つて並んだ机の一番向こう。こちらも端にいるのでつまり、最も離れた場所。裏口も向こうにあるので、相手をどうにかしなければいけない。

ときおり、そこかしこで床や机が乾いた音を立てる。どうやらこちらの正確な位置は分からぬらしい。ここから向こうまで直線距離で二十歩もないだろう。机の影になる場所を進めば、一番問題が少ない筈だ。弾道をたどれば、相手の場所にまず間違いないなくたどり着く。

すぐ横を、弾丸が通り過ぎた。

「つっ……」

青年の足をそれがかすめ、薄く血が布地に滲む。

銃口が向こうを向いた。

少年がそれを叩き落そうとするより速く、引き金が引かれた。乾いた音が空気を振動させる。

その弾が向こうに発信源を知らせる前に、彼は自分が背を向けていた机に飛び乗り、蹴った。連なつて机の上に散らかっている天井の破片や資料が踏まれ、紙が宙を舞つた。

一步踏み出したとき、相手が先程よりも長く、黒い機械を手にしていることに気がつく。短機関銃、俗に言うサブマシンガン。引き金を引き続ける限り、一秒間に十発以上の弾が発射される、武器だ。一発ずつの貫通力は高くないが、こんな普通の事務所ではどこに隠れていても隠れきれない。狙われれば終わりだろう。

その銃口は、少年を通し、先ほどまで彼が隠れていた机の列の端に向いている。こんな物が相手では、プラスチック製の事務机など跡形もなくなってしまう。

踏み出して三歩目。引き金に指がかかつた。三歩半で、引かれる。向こうまで残り十三歩で、始めの弾丸が、前に突き出した彼の右腕を引き裂いた。残り九歩で、腕中の皮膚がぼろぼろに裂ける。

六歩半で、相手の顔が驚愕に引きつった。右腕のネジがいくつか机の上に転がり落ちる。

残り三歩で、腕の形をとつている金属が、指まで姿を現した。鈍い金属光沢を放っている。

次の瞬間には、相手の銃口を抑える十分な距離にいた。下からその銃口を右手で握り、無理矢理ねじ曲げる。パキ、と音がして金属の破片が飛んだが、きっとあれは腕の方だろう。筒の潰れた銃が、床に落ちる。

「まさか……」

相手が目を大きく見開いたまま、水分の不足した声を出した。そ

の声と重なつて、モーターの動く音が誰にも聞こえないほど微かに鳴つて、彼の腕の肘から手首までを構成しているものの一つが、そこから十五度だけ上に持ち上がる。切るよりも刺すことに優れる先の尖つた刃が、恐ろしい程静かに、鋭く光る。

息をのむ音がこだまし、その音を出したばかりの喉に刃が突き刺さつた。首の後ろまで貫通したそれが抜けるころには、人だつたものは人でないただのものになり、赤い血を撒きながらそれは床に伏せた。

再び、静けさが全てを包み込んだ。

chapter 1 - 2 (後書き)

私のうつかりミスで、書き溜めてた続きが全て消滅してしまいました。ショックが大きすぎて更新は大分先になりそうですね。すみません。

絶え間なく響く轟音。

音と一緒に倒れる影。

誰かが呟いた誰かの名前。

その人間の最後の言葉。

最後の言葉を、受け止める者はいない。

灰色の空の下で響く泣き声。

泣き声を上げる人が流す涙。

涙で濡れていく地面。

地面にたまる、赤い血と透明な水。

みんなで連れ立つて歩くのは、楽しいけど、今は全然楽しくない。

とっても不安で、どきどきする。

どうか生きていてください。昨日からずっとお祈りしてるけど、誰か聞いてくれたかな、神様なんていなって、知ってるけど。

「まだ子どもなんだから」「危ないから駄目だよ」って大人たちは言つたけど、必死で頼んでなんとか許してもらえた。私なんて何の力にもならないけど、じつとしてるのに耐えられなかつたんだ。家族になるつて言つてくれた人なのに。もう失うのはいやだ。

「大丈夫？」

横にいる友達に聞かれ、なんとか笑つて頷けた。その子も不安そうだから、手を握ると、恥ずかしそうに笑つてくれた。

「いいか、絶対はぐれるなよ。それから大人の見える位置にいること、危ないところには行かないこと、いいな」

私達は、前を行く男の人そろつて返事をした。

歩いて行く地面は固くて、乾燥している空気はすこく砂っぽい。

ここしばらく雨も降つてないからかな、でも、空は見渡す限り灰色で、雨は降つてもおかしくないみたい。だんだん、横に並んでいた家は少なくなるけど、早足であつちこつち駆けて行く人は増えてきて、深い青色の服の軍人さんも増えてきた。道端に、なんどか見たことある、長い銃が落ちていたけど、みんなあまり興味はないみたい。だつて、見たくなくても、いつでも見られるから。

「まだ残党がいるって話ですよ。まあ、今更にを信じていいか分かりやしませんけどね。でも、気をつけるに越した事はありませんから、特に子どもは、」

私だけに言われたわけじゃないけど、居心地が悪くなつて、視線を落としました。

そう教えてくれたその人は、忙しそうに私たちと逆の方向へ走つていった。

瓦礫だらけのそこにはたくさん人がいて、怪我をしてる人たちを助けにまわつていた。あつちこつちで大声が響いたり、血だらけの人を潰れた建物の中から引っ張り出している。

近くで悲鳴のような泣き声が聞こえた。そこには、頭から血を流して、片足が潰れてしまつた人が横になつていて、その側に膝をついた女人が泣いていた。

すごく怖くなつた。これ以上はないつて思つてたけど、もつともつと怖くなつた。

私の左手を握る友だちが、手にぎゅっと力を入れた。とつても真剣な顔でその人たちを見ていて、私も更に力を入れて握り締めた。

本当の偶然だつたのに。ここまで来ることは滅多にないのに、それが、おとといの、こんな事になる日と重なるなんて。

どうか。どうかみんな無事でいてください。

散らばつてもいいつて言つて、私は助けられた人たちが治療してもらつてる場所に行く。もしかしたら、もうあの人人は助けてもら

つてるかもしねり。

いっぱい人がいて、怪我をしてる人が殆どで、地面は真っ赤だつた。知つてゐる人を見つけようとして人ごみの中に入つた。

だけど、私は小さすぎるから、なかなか見えないみたい。邪魔だつて怒鳴られて、ぶつかつて、転んでしまつた。膝をすりむいた。泣きたくなる。痛いからじやなくて、何も出来ないのがくやしい。知つてゐる人がいなくて、怖い。

「カヤ」

私の名前が聞こえる。

近くのベンチ代わりの台に座つてゐる女の人が、驚いたように私の顔を覗き込む。私もびっくりして、その人を見上げる。

「来てくれたの」

頷いたら、ぎゅっと抱きしめられた。温かくて、ほつとして、嬉しくて、私もぎゅっと抱きつく。今度は安心で、泣きそう。

「けがは、けがはしてない？」

まず知りたかつたことを聞くと、笑つて、だいじょうぶだつて言ってくれた。でも、その頭に白い包帯を巻いてる。うつすら血が滲んでいる。痛そう。

悲しくなつた私のほつぺたに優しく触つて、微笑んでくれた。もう一度私は、強く抱きついた。

「ほかの人は、どこにいるの」

そう聞いたたら、あと見つかつてないのは三人だけど、見つかつた人は全員無事だつて教えてくれた。見つかつた人の中に、家族だつて言つてくれたあの人はいない。

探さなきや。探しに行かなきや。

心配してくれたけど、私はそこから離れる。だつて、見つけなきや。早く、早く見つけなきや。

人が集まつてゐるところには全部行つたけど、いない。助けられた人の顔もみんな確かめたけど、いない。

怖い。怖くて怖くてつぶれそう。

だから走る。全部の場所を確かめに行く。

たくさん瓦礫を越えて、崩れかけた建物の中も覗いて、その度に悲しくなって、また走る。

気が付くと、近くには誰もいなくなっていた。大人も、子どもも見当たらない。冷たい、崩れかけた建物ばかりで、すぐ静かで。だれの声も聞こえない。だれもいない。

遠くまで来ちゃった。戻らなきや。

でも、まだ見つけてない。この先にいるかもしれない。もう少し先で、待ってるかもしれない。すぐ足が痛くなってる。がたがたの上を、ずっと走つてたから。

頭に何かが当たつた。見下ろした足元の土が、ほんの一箇所だけ薄い茶色から濃い茶色に変わってる。

雨だ。ほとんど白に近い空を見上げた。

大きな音がして、真っ暗になった。

誰かが建物を爆発させて、大きな瓦礫が降ってきて。積み上がった瓦礫の隙間に入つて死ななかつたのは、多分きせき。でも、きせきでも、ここから出す事は許してくれないみたい。

真っ暗。冷たい。目が覚めたら仰向けになつて、身体中に固くて重いものがぶつかつて、動けない。身体の横にぴたりくつついてた左手を持ち上げて、顔の上にある石を押したけど、全然動いてくれない。びくともしない。

言う事をきかなかつたから。ひとりでこんなことまで来ちゃつたから。ごめんなさい。ごめんなさい。

でも、怖いよ。いやだよ。お願い、出して、ここから出して。だれか、だれか助けて。

誰か聞いてくれるかもしれないから、大きな声を出した。出そっとした。だけど、さつきあの人を探しているときに、いっぱい叫んだから、空気がすごくほこりっぽかつたから、のどがからからでち

よつとしか声がない。出ても、ここに人がいないことは、知つてゐる。

動けないから、ずっと上を向いていたら、なにかが顔を伝つていつた。

しばらくして、自分の涙だつて、気付いた。

怖い。ここで、死んじやうのかなあ。頭がぼんやりする。なにも考えられない。考えたくない。

また、目が覚めた。涙は乾いてた、といつより、もう出なくなつてゐる。

何分たつたんだろう。何時間？もう、いいや。さつきと同じで、真つ暗で、何も見えない。私、もう死んじやつたのかなあ。でも、足が痛い。尖つた瓦礫にさわつて、じつとしてるけど痛い。だから、まだ生きてるんだ。こんなに怖いのに。寂しいのに。死ぬまで、どれくらい辛いのかなあ。いやだ。そんなの、いやだ。こんな思いで、死んでいつたのかなあ。

だれにも助けられず、寒くつて、もつと痛くて、怖くて、一人ぼつちで。死んじやつたのかな。

私も、死んじやうんだ。怖い。死にたくないよ。生きていきたいよ。でも、動けない。何も聞こえない。何も出来ない。死ぬしかない。

また、時間がたつて、音がした。近くだつた。遠くだと思つたけど、近かつた。

少しして、顔に、冷たい水が落ちてきた。上の瓦礫の隙間から。次にはほんの少しだけ、光が落ちてくる。

すぐに、その瓦礫はなくなつて、遠くに空が見えた。夜になつてた。でも、この中よりは、ずっと明るい。雨は止んでる。

外から、だれかが手を伸ばしてきた。だれか分からぬけど、なんとか左手を上げたら、その手がしつかり握り締めた。温かい、左手だつた。

chapter 2 - 1 (後書き)

176日ぶりの更新らしいです。内容を大幅に削つてやつと出来ました。FD一枚だけにデータを保存するなんてこと、一度としないと誓いました。

「またお前か」

怒りを通り越して呆れを含んだ声に、どうも、と、セグは頭を下げた。

「でも、指がとれただけなんで」

「そんなら、軍部内でみてもらえればいいじゃねえか」

そう、軽く声を荒げる修理屋の男の年は、六十は過ぎていそうで、すでに老人の域に入っていたが、その威勢の良さは目の前にいる、息子という年よりも更に若い兵士より勝っている。

「ここで直してもらつたほうが、壊れにくいんだ」

「壊すこと前提にするな」

なんだかんだ言いながらも、修理屋は、部屋の大半を占める机の、端に置いた椅子を指した。内心安堵しながら、若い兵士が彼の後ろにいる影に短く言葉を告げる。それに従い、右手の薬指を失くした少年がそこに座つた。指の千切れたところから、短いケーブルがはみ出している。

全世界を巻き込んだこの戦争も、今年で六十年になる。大半の国がこの不毛さに気付き、降伏し、日常を取り戻していく中、この国はまだそれを認めてはいなかつた。科学技術、軍事力諸々において世界最大級の力をもつ国を隣に持つていて、何故ここまで持ちこたえる事ができたのか。

この国が世界一を誇る、ロボット工学を最大限に駆使しているからだ。開戦後二十年目にして開発された、人型戦闘兵器。通称 ^アar _{me}。病気、怪我等で瀕死状態にある人間の脳を頂戴して細工し、中枢としているので、コストの大幅な削減も可能にした。脳提供者の親族から許可を取らなければならないので、製造された数は少ないが、生身の兵士よりも戦闘向きだ。その為に造られたのだから当たり前なのだが。見た目は人と全く変わらない。勿論、感情や記憶

に関する部分は焼き滅ぼされているので、人の言う事に忠実に従い、コマンダーと呼ばれる役割の軍人が一人一体担当する事になつてゐる。

「おい、セグ

「ん？」

「毎回言つようだが、ほんとに反省してんのか

「してゐ、してゐつて。でもさ、何故かこいつ壊れ易いんだよな」
両脇に店が並ぶ大通り、どこも質素だが、そこで活動する人々の活気はそれを氣にさせない。沈んでいく夕日が今日の終わりを告げる中、声を上げて客の呼び込みをしている人や、家路を駆ける子ども達、仕事帰りに連れ立つて歩いて行く大人たちが目の前を通り過ぎて行く。裕福とは呼べない地域だが、この若いコマンダー、セグはどこか懐かしいその雰囲気が好きだつた。開かれた修理屋の店先に立つて、何をするでもなく、それを眺める。

「お前、こいつに無茶させすぎでないか」

ほんの僅か低くなつた声に、振り返つた。修理屋は、顔も上げずに続ける。

「他のやつと比べてこいつがここに来る回数が、何倍になつてんのか知つてるか

「何倍……。さあ、一倍いくのか

「馬鹿言え、三倍以上だ」

「三倍で、まじかよ。つまりあれだろ、他が一回壊れる間にこいつは三回壊れてるつてことだろ」「

「やつと氣付いたか、明らかに異常だらが」

そう言われ、セグは腕を組んだ。コマンダーの数はかなり少ないので、他との交流もあまりないし、会つてもそんな話はまずしない。だから知らなかつたが、異常だという氣はする。

「でもなあ、この前点検したときも問題無しつて結果だつたんだけどな

「軍部がおかしいんじゃねえのか

「んな」と言わないでくれよ。言われてみれば、確かに無茶してるのはするけどさ、命令は他と変わらないはずだぜ。なんつーかさ、忠実すぎるとは思うけど

「そりゃ別にいいじゃねえか」

「それが限度越えてるっぽいんだよ。自己防衛が効かないっていうか」

本来は任務遂行の際でも、ある程度は自己防衛として自分で自分を守るように出来ている。

「あまりやらないんだよな、それを。少々の危険なら突っ込んでくんだよ。そんでもボロボロんになって帰つて来る」

そのとき、なんだか複雑な感情に襲われる。自分の命令で人が傷つき、死んでいく。当たり前なのだが、しなければならないことなのだが、自分が被るべきその重荷を無理矢理負わせているような負い目が沈む。痛みも感じない、泣きもしなければ笑いもしないこの口ボットに。

何馬鹿な事考えてんだ、これは兵器なんだ。改めて彼は自分自身に言い聞かせる。

「だけどさ、優秀だつて言われてんだぜ、こいつ。その分強いから」危険を顧みないのだから、常に全力で敵に向かう。全力だから、他のものよりも強い。

「優秀？ 人殺しの成績がか？」修理屋はもう少しぞう言いそうになつたが、まだ二十歳そこそこの彼には残酷すぎる言葉だと気付き、寸でのところでその言葉を飲み込んだ。

「だからって壊していい理由にはならん」

そう言い切り、セグの顔をちらりと見上げ、自分の判断が間違つていなかつたことを知つた。

自分の受け持つ兵器が優秀だと言われていることへの驕りや満足感は、その横顔に微塵もなく、反対にどこか憂愁すら感じられる。

背景の一部である夕日が、そんな雰囲気をかもし出しているせいかもしぬないが、口ボットの銀髪に片手を置いている様子には、忘れ

去られたはずの幼ささえ覗けてしまつ。

再び腕を組み、一步店に入つたところから、セグは翳りを帯びてきた通りを眺める。何かを見ているよつて見ていらない目ではなく、確かに何かを捜し求める目で。

自然とこつこつには敏感になつてしまつた。自分を見る、誰かの視線には、誰かが見ている。そして、その誰かは直ぐに見つかった。

通りの向こうにある家の前で、家人と思われる者と通りすがりのような者が話し込んでおり、後者の側にいる、十年生きているかいなかといつた幼い少女が、顔を振り向けてこちらの方を見ていた。あいにく、子どもの氣を引くようなものは何もない。軍人なんてあちこちで見られるし、まさか椅子に座つている少年がロボットだと気付いたわけはないだろう。店先よりも少し奥にいるのだし、薄暗いそこが見えるのならあの子はよっぽど目がいい。

やがて決心したのか、薄茶色の髪を背中まで垂らし、片足に薄く包帯を巻いている少女は、幾度も後ろを振り返りながら通りを横断しだした。極めて大人しげな行動に、連れ合いが気付く様子はない。長袖をふらふらと振りながら歩いてきた彼女は、セグから二メートルは距離を保つたところでピタリと足を止め、おどおどと視線を泳がせる。

「まいつたな」と、声を出さずにセグは小さくため息をついた。子どもとの接し方など、習つた事はない。

「おい」

迷つた拳句、この空気に耐え辛くなつた彼は普通に声をかけることにした。が、店先から中を覗き込んでいた少女は、びくつと身体を震わせ、明らかに怯えた表情で見上げる。

おいおい、頼むから泣くなよな。その可能性が否定できない彼女へ、「なんか用か」と続けた。

「あ……あ、あの……」

しどろもどろになりながら、彼女は風に吹き飛ばされそなか細い

声を出す。やがて、俯き加減な顔を上げ、「おれい、言ひにきたの上田遣いに呟いた。

「お礼?」

「助けて、もらつたから……」

数歩歩み出て、店の一歩手前まで近づくと、「ありがと」などと大きく頭を下げる。

彼女が勇気を振り絞つて礼を言い、頭を上げると、堪えるような笑い声が聞こえた。すぐに、修理屋の老人が豪快に笑い、自分の横にいる兵士も吹き出し、尚且つ口に手を当てて懸命に堪えようとしている。

なにか間違つた事をしてしまつたのだろうか。急速に不安に包まれ、泣きそうな顔をする彼女に、「悪い悪い」とセグが片手を挙げ、修理屋がやつと少女の方を見る。

「嬢ちゃん、こいつは人間じゃないんだ

「えつ」

にわかには信じられず、彼女はまじまじと前方にいる少年を見る。ようやく笑うのをやめた兵士を、その赤い瞳で不思議そうに見上げ、右手を横の机に投げ出している。その手の先を見た途端、思わず息を呑んだ。

指が一本ない。もぎ取られたように千切れしており、その代わり当てた金属の指を、取り付ける作業の途中だつたらしく。

「ロボットなの

「そう。パツと見じや分からねえけどな、皮膚の下は全部機械だ」「名前は、なんていうの」

初めて、怯えのない瞳で彼女がセグを見上げた。それなのに、セグは逆に予想外の言葉へ若干戸惑つてしまつ。驚きが少なすぎやしないか。子どもの柔軟さつていうのはやつぱりすごい。

「長つたらしい製造番号がついてんだけど、その文字とつて俺はウツて呼んでる

口だが、他に思いつかなかつたし、他の奴もだいたいが適當だ。実在する人物の苗字なんかをつける奴もいるが、極めて稀だ。いざとなつたとき情が生まれかねない、そうなつたら、終わりだ。

何度か頷き、彼女はその名前を呼んだ。自分のあだ名を認識し、振り向いた光のない赤い目に、彼女が何事か話しかける。理解しているのかは分からぬし、必要な言葉しか話さないようにプログラムされているので、返事はないが、どことなく不思議そうな顔をしているように見える。表情筋が生身の人よりも極端に少ないし、そんなはずはないのだが。

少なくとも、初めてこの人型戦闘兵器を見たとき、セグは恐れを感じた。国の科学の粋を集めて造られた人殺しの道具に、それが全く人と同じ姿をしている事に、畏怖した。そのときはすでに子どもではなかつたのに。しかし彼女には、全くそれが見られず、むしろ笑つてすらいる。

「どこで生まれたの」とか、「何が好き」などという答えようのない質問に、良くても「分からぬ」しか返つてこないのに、少女は楽しそうに笑つてゐる。

奪われる側の子どもと、奪う側の兵器が、恐怖も痛みもなく向き合つてゐることは、限りなく新鮮だつた。少なくともセグには。その様子はあまりにも自然で、違和感など微塵もない。

「カヤ！」

突然、切羽詰つたような大声が、遠くから聞こえ、あつという間に距離をつめた。

「あつ、あのね」

少女が離れていたことに気付いた、連れらしき女が、その肩を掴むと自分の後ろに回した。カヤと呼ばれた少女をかばうような位置関係になり、責めるような目でセグを睨みつける。肩を少し過ぎる程の茶色い髪に、漆黒の瞳をした、女性にしては割と背の高い女だ。流石に、仲間内では背は高くないセグよりは低いが、年はあまり変わらなさそうだ。

「カヤに何をした」

いきなりの事態を理解しきれていない彼に、問い合わせる。

「なにして、別になにも」

とりあえず真実を彼が告げ、彼女の後ろから顔を出したカヤがなんとか言葉を挟む。

「あのね、この前わたしを助けてくれた人がいたから、だから、ありがとう言いにきたの」

話は聞いていたのか、彼女はセグから視線を外し、ヨウの方へ向けて。それで、確信したらしい。

「ロボットか。たしか、アームつていう」

再び向けられた、彼女の探るような瞳へ、セグはなんとか動搖を隠す。人型戦闘兵器のことは、殆ど国民に知らされてはいない。脳の提供者を探すときも、募集しているわけではなく、極力秘密裏に行なっている。必要以上に倫理的問題を騒がれても面倒だからだ。その名前も、そこかしこに流通しているわけではない。

「お前、何で」

「そういうえば、人の脳を使つてるんだつたよな。人を兵器にするなんて真似やつてるつて」

「でたらめ言つてんじゃねえよ」

「でたらめ？ それはあんたが一番よく知つてるじゃない」
皮肉な、ひきつった笑みで彼女はセグを見据える。極めて悪い空気しかない。

「好きで人殺すようなやつの考え方なんて、分かりやしない」「好きで人殺すわけないだろ」

「どうだか」

彼女の態度に流石に腹が立つてきたセグには、その瞳の奥にある憂いに気付く事ができない。

「あんたみたいな奴らに、私たちの家族は殺された。この子は、右腕まで奪われた」

うすうす感づいてはいた、カヤの腕、肘の少し先からは存在しない。

先天的なものが、後天的なものは分からなかつたが。

「そんなやつ、私は許せない」

許してもらわなくとも結構だと非常に言つてやりたかつたが、彼女が去る気配を見せたので、我慢してその背が雑踏へ消えていくのを眺めた。左手を引かれた力ヤが不安げに幾度か振り返つたが、それもすぐに見えなくなつた。

「えらく嫌われてんじゃねえか」

片手で自分の髪をがしがしかきながら、その声に振り返る。

「まったく、勘弁してほしいよな。ハツ当たりつてやつだろ、これ」

「よくあることじゃねえのか」

「まあ、そうだな。重ねちまうのはしょうがねえんだろうけど、嫌になるわな」

ため息混じりに軽くヨウの頭を叩いた。体温維持装置がついているので、機械らしくなく、温かい。救出の際、少しでも相手に安心感を与える為らしいのだが、実際に効果が上がっているのか、セグは知らない。

当たり前だが、嫌そうな顔一つせず、ロボットは彼を見上げた。無機質な赤い瞳に、光はない。

人の住まない荒れ果てた村。

村の中で静かに響く銃声。

銃声の中で音もなく倒れる影。

影を染めていく液体は赤。

赤が、どこまでも広がっている。

燃え盛る炎と誰かの悲鳴。

悲鳴の中に混じる言葉。

言葉が聞こえるという欠陥。

欠陥の向こうで、誰かが呼ぶ。

人気のない、比較的国境に近い荒れ果てた村を、人型戦闘兵器「Y3562-140」通称ヨウは、極めて緩やかな歩調で進む。気温はかなり上がっていて、人の体温とそう大きな差はない。これではサーモグラフィーもろくに役に立たない。もし誤差が起きて、見当違いに人を殺してしまえば、それが自國の人間であれば大事だから今は使えない。

広く茶色の道の脇に、木造の簡素な家が立ち並んでいる。殆どが、扉の蹴破られた後で、昼なお暗い家の中の様子が見て取れる。ひたすら荒らされていて、外にまで家財道具や小物が散らばってしまつており、未だ消されていない血の跡がこびりついている。

虚ろな瞳でそれらを確認し、瓦礫やなんかが飛び散つている道を歩き続ける。鳥の声も、木や風の音も聞こえない、蒸し暑さに支配された静寂。村一帯に満ちている。

だが、異常な聴力を持っている彼は、それに気が付き、ふらりと

足を止めた。だらりと両手を下げ、なんの警戒もしないように見えるまま、ゆっくりと横へ振り向いた。

その直線状の廃屋に潜んでいた兵士は、彼の予想外の動きに思わず引き金に指をかける。しかし、指にはまだ力が入らなかつた。スコープを覗き、更にその気持ちも薄れていく。

「いじも……？」

そこに映つたのは、ただ理不尽な戦争に傷つけられた、一人ぼっちの少年だつた。土ぼこりに汚れた顔はただ呆然としているように見え、身体中からは力が抜け切つてゐる。その彼が、こっちを見ている。自分の敵を、じつと見ている。

一步こちらへ踏み出した彼へ、兵士は何事か呟いた。誰かに届ける為ではない、ただの独り言のような言葉を。

彼の知識では、聞き取つたその単語の意味を解する事はできなかつた。瞬時に最大限まで脚力を引き出し、地面を蹴り、敵のもとへたどり着く。その勢いのまま、片手を相手の額にあて、向こうの壁へ叩きつけた。ヘルメットでもしていたら、刃で貫くつもりだったが、その必要は無かつた。

手の力を抜くと、後頭部の潰れた兵士が、壁を赤く彩りながら床へ伏す。

運悪く即死を免れてしまつたが、その心臓も、赤い瞳が見下ろしている間に拍動を止めた。

完全にそれが死体に代わるのを確認し、数分後に、殺人兵器は再び村を彷徨つていた。

相手の同情と油断を誘え、かつ活動が最大限に行なえる、幼すぎず大人び過ぎていらない容姿に、彼らは造られている。その姿を見て、記憶の中の誰かを思い出す者がいる、そんな心の弱さにつけこんで。卑怯ではない。戦場でそんな無駄な事を考える奴がいけないのだ。どうせ、そんな甘い覚悟では、いずれ近いうちに死ぬ。

ヨウの感じ取れる範囲では、生きている物はない。人ビニルが、犬や鳥でさえも、なにもいない。この死んだ村には。

ふと、彼は近くの家の土壁に目をやった。わざわざ田をやつたと
いうよりは、ただ視界に入つただけだったが。

勢いよく燃え盛る炎。

異常な温度の、こもつた熱風。

人の声。恐怖を代弁する、叫び声。

知らない単語。短いが、いやに慣れた感じのする言葉。
自分に、呼びかけている。

誰が。

どこで。

誰が。

ひどく、悲しい声。

それらが過ぎ去つた後、視界には灰色に汚れた壁しか映つていなかつた。どこにも火はない、だが、火は見えていた。何の物音もない、だが、誰かが叫んでいた。

ヨウは、一部が焼け焦げた壁を見つめたまま、先ほどの記憶を、今まで自分が視覚を通して記録してきたものから検索する。

一秒にも満たない結果によると、該当するものは存在しなかつた。何かの間違いで記録がよみがえり、視覚に及んだのではなかつた。では、さっきのはなんだ。あり得ない。存在しないものがよみがえるなんて。

重要なバグだ。しかし、今の優先順位はその特定ではない。この廃村に残つてゐる敵を一掃する事。

彼の脳は、そう判断した。

軽い足取りで、片手に握れるほどの花束の茎を握り締め、カヤは石段を駆けていく。自分に与えられた、重要な役割を果しに行く。

結構しづらぐの間、続いている習慣。

「暑いけど、みんな元気だよ」

そう明るい声で話しかけながら、幾つも並ぶ簡素な墓の前へ、彼女は花を一つ一つそえていった。今は土の下に眠っている仲間に手を会わせ、言葉をかける。やつと聞こえていると信じながら。

今日は特に暑い。空はどこまでも青く、遠くの方にむくむくと湧き上がる入道雲が見えるだけだ。

側の草むらに腰を落とし、しづらぐの間それを見上げていたが、やがてカヤはゆっくりと立ち上がった。

視界が横倒しになつていて。右頬を地面に押し付けているせいで、殆ど生い茂つた草しか見えない。その草が、鮮やかな緑色をしているはずのそれが、近くのものだけ赤く染まつていて。身体から流れる血が、景色を赤に染めていく。

絶え間ない、浅く荒い呼吸のせいでの、視界がぶれる。

どこから、声が聞えた。憎々しげで、弱々しいかすれた声が、無い風を伝つて聞えてくる。何と言つていてるのか、すでに本来の機能を失つた耳は、聞き取つてくれない。ただ微かに、一番身近な自分の苦しい呼吸音だけがある。

しだいに、視界が暗くなつていく。

同時に、押しつぶされそうな巨大な何かが這い上がつてきた。自分の中から、その暗闇に抵抗しようとする感情が、大きな何かが、どこからか。

だけど、闇は迫つてきた。抗えなかつた。遠くに聞こえていた声が、一度だけ鮮明に、言葉として聞えた。

今までほぼ機能を停止していた聴覚がよみがえり、近くで聞えた声に、びくりと元氣は反応した。自分の前方にあるのは、青い草原くわいはらと、ところどころにある木々。それらの枝が高いところで重なり合ひ、空を薄く覆つていてるので、ここでの気温は比較的低い。涼しいというべきか。

血の跡はあるか、横倒しにもなつておらず、ただ立ちすくんでいた。検索結果には、今の記憶も存在しない。

「ねえ、どうしたの？」

そつとその横に立つたカヤが、見上げながら問いかける。ただ涼む為に、かつての村の裏手にやつてきたら、ロボットの彼がいた。じつと草むらの中に立つたまま、何かを見つめていたその姿に、人で

はないと分かつていても、心配になる。

「何があるの」

彼は、好奇心と不安感を器用に共に含んだ声を出した彼女を見下ろす。何があるか、イエスかノーか。

「何も。何も無い」

ここには、何も無い。木と草と微かな風しか。

じわじわと、脳が何かに締め付けられる。機械で出来ているはずのそれが、潰されるように、押しのけられる。何に。からうじて残つた、人の部分に。

冷静で機械的な分析や演算など、その不可解な現象の前には、何の役割も果してくれない。あの暗闇は、それに抵抗する感情は、なんだ。

しかし、それが表情に漏れる事はない。

「そつかあ」

カヤは、足元を見下ろして軽く草を蹴つた。さらりと、澄んだ音が空気を震わせる。

「でもね、ここね。私には、大事な場所な

真つ直ぐに自分を見下ろす瞳を、彼女の黒い瞳が見上げた。

「ここでね、わたしの兄ちゃんが死んじやつたのかかもしれない」何でこんなことを話しているのか。相手がロボットだからなのか、殆ど知らない相手だからか。分からぬが、彼女は口を開く。

「ここ、わたしがずっと住んでた村だったんだけど、なくなつちやつたの。その日にね、兄ちゃんも戦つたんだけど、いなくなつちゃつたんだ」

自分が腕を失い、たつた一人の肉親をなくした日。思い出しても、すでにその為の涙は枯れてしまつていて、今は出ない。

「ここで、血だらけで、倒れてたつて。だから、助けなきやつてみんなで助けに行つたんだけど、そのときにはいなくなつてた。地面が、赤くなつてただけだつた」

死体は無いから、死んだとは言い切れない。だから未だに、彼だけ

には墓が無い。どこかで生きているかもしれないから。

だけど、カヤには分かつていて、彼が倒れていたのを見た人が、死んでいると判断したほど、傷ついていたのだ。血だらけだつたのだ。勿論、逃げ出せるわけが無いし、それが出来ていたなら、戻つてきているはずだ。

生きていると信じているが、もう生きていな事は知つていて、「それでね、大人の人たちが言つてたんだけどね、あなたたちは、人間を使って出来るんでしょ。でね、それに使われちゃつたんじやないかつて言つてたの」

透明な潤いを湛えた瞳が、気丈にも笑いかけた。そして、その名を告げた。

しかし、人としての頃の名が、そのまま兵器として残つていてわけは無い。その上、他の機体についての情報は、彼の中に入つてない。

「分からぬ」という返事を、喜びと悲しみを込めて、彼女は受け止めた。例え人で無いとしてでも、彼を用いたロボットがあるなら会いたかったが、殺人兵器として生き続けているのは、見たくなかった。

「ありがとう」と、少女は呟いた。何故。自分は、正しい答えを与える事はできず、分からないと、否定の言葉を使ったのに。「あらがどう」は、人が礼を言うときの言葉。この単語を言われたのは、これで二回目。両方とも、彼女が使つた。

ヨウには、彼女が理解できなかつた。その小さな少女は笑つている。悲しそうな顔なのに、何故か笑つていて。これは、苦しいときの人間の表情だという事実だけ、彼には分析することができた。正面に戻した視線。赤く染まっていく風景。ジワリと滲むように、青い草と木の表面が、赤く染まっていく。

「どうしたの」

再び、カヤがたずねる。自分を見なくなつた彼を見上げる。その瞳

は、大きく見開かれているが、その視線の先には、生い茂る草しか認められない。

「ヨウも、ここにおもいでがあるの？」

何か探しているのだろうか。彼にしか見えない、記憶を探しているのだろうか。

彼がロボットだと熟知している大人なら、とてもそんな発想はない。しかし、純粹に子どもである彼女であるから見抜けた、極めて真実に近い言葉。おもいで。

彼の口が僅かに動いたが、どういうわけか発声がなされない。かろうじて、かすれた小さな声が漏れているのだということだけ分かる。だけど、なんて言っているのかは聞き取れない。

「ねえ」

虚ろに前を見つめる彼の服の裾を、そつとカヤが握り締めると同時に、「しんだ」とヨウがやつと呟いた。

「えつ」

「……ここで……死んだ」

かつてここで失われた命があつたことを、はつきりと彼が示す。

「死んだって、だれが」

「それは……」

苦しそう。そう、彼を見上げてカヤは思った。そんな微妙な表情など、物理的に不可能なはずなのが、そんなことなど知らない彼女は、そう思った。本当に、苦しそう。

ロボットの彼が繋ぐ言葉を聞き、彼女は彼の言いたいことを理解する。

ここで、ヨウは。いや、以前の彼は死んだ。

確かに彼は、そういう意味のことを言った。

「起きる」のボケがあつ！」

唐突に耳朶を打つたのみ声に、セグは飛び起きた。

「な、なんだよいつたい」

「なんだもかんだもねえ、さつさと来い！」
自分はまだ寝ていていいはずなのに、無理矢理仮眠室から引っ張り出される。わけがわからない。

「おい、なんだよ。なにがあつたんだよ」

「人型戦闘兵器が、一体なくなつた」

「なくなつたつて。なんだよそれ、盗まれたとか

「そんなわけねえだろ」

廊下を先導する仲間は心もち早足で、叩き起^こされた不満よりも、ただ事ではないという不安が、急速に沸き起^こつてくる。

「最上級のAIつきの兵器だぜ、そう簡単に盗られるわけねえだろ。製造番号Y3562-140が、修理のやつが朝見に行つたときは、消えてたらしい」

「消えてたつて……」

まあ、盗まれるわけはないだろつ。だが、そんな非常識な自発行動をとるわけがない。

しかし、それより。

「ちょっと待て、それって俺の担当じゃねえか」

「気付くの遅せえんだよ！」

「どこ行つちまつたんだよ！」

「知るか、それを探すんだろが！」

「ああ。とんでもないことになつてしまつた。

驚き間もないセグには、そう嘆く事もできなかつた。

本当に来てくれた。

三日前に約束したときは、彼には悪いが半信半疑だった。人間みたいだけど、人間だとしか思えないけど、彼はロボットなのだ。こんな子どもの言葉など、聞き流されるんじゃないかと思っていた。だから純粹に、嬉しかった。

ヨウは、この前と同じ様にじっと同じ場所に立ちすくんで、木と草の海を見つめている。瞳に映っているものは同じはずなのに、違っている事はカヤにも分かる。

「なにか、見えるの？」

控えめに尋ねると、彼は一度だけ確かに頷く。彼にしか見えていない何か、おそらく、彼の脳が記憶している風景。その持ち主は、ここで死んだ。

一人と一体は、何も言わずにそこに存在し続ける。三日前が嘘のように、今日は真っ白な曇り空で、鳥の声も聞こえてこない。充满する静寂の中、彼らはただ、そこにいた。

あの時。自分は、死んだ。いや、正確には死にかけた。その時、最後に聞こえた言葉。

最後に、鮮明に聞き取れた言葉。

ああそうだ。

やつと、思い出せた。

あれは、自分が殺した、少年の言葉だ。

「最後に聞こえた」

ぽつりと、ヨウが呟く。

「聞こえたって、何て」

「カヤって、言つてた」

「おい！ ヨウ！」

突然大声が響き、カヤはびくりと身体を震わせた。

向こうの木々の間に見える誰かは、あつといつ間に近づいてくる。見覚えのある、若い兵士だ。

「なに、やつてんだ。こんなとこで」

驚きを滲ませながらも、セグは目的の側に立ち尽くすカヤに問いかけた。叱られたような、明らかに怯えた表情をしているが、今は構つていられるときではない。

「ここには危険だ。すぐに帰るんだ」

こくりと、少女は小さく頷き、大きな瞳でセグを見上げた。

「わたしが、約束したの」

「約束？」

「ここにきてつて、三日前にお願いしたの」

「きみが、こいつにか」

「うん」と答えた声を聞きながら、セグは驚愕からヨウを見下ろし、すぐに苦々しげな顔を作る。いくら人の言つ事を最優先で実行するといつても、軍人でもない民間人の、それも命令でもない曖昧な約束なんていうものに従うわけがない。それも、居場所を抜け出でくるという、勝手過ぎる自立行動のもと。その上、無線にも応じない。あり得ない。しかしあり得てしまったんだから、今の状況をどうにかするしかない。

「とにかく、話は後にしよう。ここはもう……」

立ち入り禁止区域になる。そう言いかけた。

セグの足元の地面が弾け、反射的にカヤを抱えて木の後ろへ転がり込んだ。「伏せてろ」と短く告げて、拳銃を取り出し安全装置を外す。何が起きているのか理解できていないようだったが、彼女は大人しく、言われたとおりに草の中に伏せた。

チツと舌打ち混じりに、相手を確認する。草木に阻まれ、正確には分からぬが、四五人はいるようだ。 まづいな。

一人でも危ういのに、子ビもを無事に守つて生き残れるとは考え難い。だが、やるしかない。視線の向こうには、さつきと変わらずヨウが突つ立つていて。

「くつそ、なにやつてんだあいつは」
敵だと認識できているはずだし、発砲までされている。それなのに、戦う事も、防御する事もせずに、ただ無防備にそこにはいる。これは狙つてくれ、壊してくれと言つていてのと同じだ。ひどいバグだ。帰つたらどうにかしなければならない。そのためにはまず、帰らなければならぬ。

セグのものではない銃声が響き、カヤが身を震わせた。
立ち尽くす機械の腕に、銃弾がめり込んだ。徐々に外側の人工皮膚や中の金属が零れ落ちていく。

一発が首をかすめた。内部の機械が覗かれる。

応戦したセグの銃撃に、一人が身を隠すが、攻撃が止む事はない。ロボットの足が狙われ、装甲が剥がれ落ちた。

「つう」

セグの肩を一発の銃弾が通り過ぎる。

溢れ出した赤い液体が、彼の肩口を染め、草に赤い模様を作り出す。

痛みに耐え、顔を上げたその日に、赤い瞳が映つた。

ヨウが、振り返つてじつとこちらを見つめている。光のないその瞳で、何かを訴えている。出来ないはずなのに、そんなわけはないのに、その表情はどこか寂しげで、孤独を浮かべている。

なんだ。何が言いたいんだ。

一瞬、この状況下を忘れて、胸中でセグは問いかけた。

ヨウは、答えなかつた。答えるわけがないが、答えなかつた。

ふつと一步を踏み出し、一步田で地を蹴つた次の瞬間には敵の眼前にその姿は現れた。そのまま、相手の首へ腕にくついた刃を突き刺す。次に撃たれる前には、すでに移動を開始していた。

的確に、銃口の向きから弾道を演算し、それから僅か数センチ離れながら、あつという間に次の獲物にたどり着く。背後に回りこみ、その背を突き刺し、相手の胸から刃を露出させる。

そのまま数秒停止した。

彼が盾にしている敵の胸から腹へ、五発の銃弾が飛び込む。

刹那に刃を引き抜き、地を蹴った。

強かつた。ここにいる誰よりも、彼はずつと、ずつと強かつた。俯いているカヤの頭を軽く抑え、瞬きするのも忘れ、セグはそれを見続ける。一方的な殺戮、本気を出した人型戦闘兵器に、もはや銃弾など当たらない。躊躇いなどない。当たり前だ。殺人兵器としての、存在意義を貫いているだけだ。

それなのに、どうしてだろう。無意識下で「もういい」と叫びたくなつたのを、なんとかセグは堪えた。それと同時に、途方もない吐き気のよくなものが襲つてくる。血に怯えていては、兵士なんか務まらない。違う、そんなことではない。気付いただけだ。今まで自分がやらせていたことを、間近で見てしまつただけだ。

今までずつと、こんなことをし続けていたんだな。俺が、お前に、やらせていたんだな。

同情などというくだらない無責任なものじゃない。哀れみでも、自分に対する罪悪感でもない。それなのに、ふと、そんな思いが沸き起つた。ただ事実を見て、彼はそう思つた。

「おい！ 無事か！」

後ろの方で声がし、セグは緩慢に振り返る。見覚えのある顔がいくつか、向こうからやつてくる途中だつた。

「民間の子だな」

「ああ。保護してやつてくれ」

素直にカヤは立ち上がりてくれた。その澄んだ瞳を長いこと見ていられず、セグは再びヨウヘ視線を戻す。「見つかったのか」という仲間の声が聞こえたが、返事はしなかった。

最後の一人が地に倒れ付し、髪まで赤に染めた兵器が、足を止め

た。鋭い刃先から、彼のものでない血が滴り落ちている。

ゆっくりと、振り返った。血にまみれた顔が、こちらを捉えた。

「ヨウ、止まれ」

不意に降りた静寂を破り、セグが指示を出す。

しかし、人型戦闘兵器は「ちらへ一歩を踏み出した。

「止まれ。止まるんだ」

諭すように囁くが、その動きは止まらない。一歩一歩、距離をつめてくる。

「どうした、こいつ、言つ事きかないのか」

驚愕と恐れを交えた声を聞き、そうかもなと声を出さず答える。不思議と、疑問も恐怖も、セグには起こらない。

なにびびつてんだよ。こいつはもう、殺さないんだぜ。俺らは敵じゃねえんだから。

明らかに、背後の仲間は、パニックに陥っている。この殺人兵器の強さは、使用者である自分達が一番よく知っている。殺す気でかかつてこられれば、今の自分達に勝機は小指の先ほどもない。

専門であるセグは、その強さを一番よく知っている。

だが、怖くはなかつた。怖さなど、あるわけがない。

帰つてきただけだ。人殺しを終えて、いつものように、帰つただけだ。

そう、いつものように。いつもと同じように。怖いわけがなかつた。

だから、言いたくなかった。

だが、言わなければならない。これが自分の役割なのだから。

「止まれ、Y3562-140」

ふつと、ヨウがセグに視線を向ける。その瞼が、ゆっくりと閉じられていく。

銃撃を受け、片足の膝が碎かれた。

バランスを失い、その場に殺人兵器はぱつたりと倒れ伏した。

硝煙を上げる、仲間が握っている銃を、セグは振り返らなかつた。

その場所は、狭く暗い。
暗いから何も見えない。
何も見えないし見たくない。
見たくない、それは誰の意思。
誰の意思が、ここにある。

灰色の空から降り続ける雨。
雨に打たれる道に人はいない。
いない誰かの鳴き声は響く。
響くその先にも、誰もいない。

「Y3562-140の開発担当責任者は、すでにこの世にはいません」

研究開発班の、しつかりした印象を受ける代表者は、さらりとそう告げた。

すり鉢状の部屋の底で告げられた言葉に、僅かながらざわめきが起きる。底を覆うように、周囲は半円形に傍聴席が設けられており、その中の八割ほどが埋まっている。この時間に作戦のない軍人は、殆どが参加する事になっている。

「二年前に、肺癌で病死しました」

それならしようがないな、と、まるで他人事のように、セグは突つ立つたままぼんやりと考えた。死んでいるのなら、責任を押し付けることは誰にも出来ない。

傍聴席から少し離れた、円の中心に近い位置の机の前。机つて言うのか、これは。学校の教卓みたいだ。なんにしても、裁判にかけ

られる被告人になつたみたいで、いい気はしない。せめて、背筋くらいたきちゃんと伸ばしておく。

「他と違つことをしているのに気付かなかつたのか」更に偉い人間が言う。今のセグには、誰のどんな肩書きも、どうでもいいものに思える。

「基本的に、プログラミングは担当者が単独で行なう事になつています」

研究者は、この雰囲気に臆することなく淡淡と述べる。

「報告書には偽装したものが使われ、機体もその後の検査にかかるような誤差はなく、現に今まで誰にも気にとめられる」とはありますでした」

「その、誤差というのを説明してもらおうか」

「分かりました」と答え、彼は手元に置いた資料の束に目を落とした。

壁の一面を占めている馬鹿でかいスクリーンに、円が表示される。中央から線が幾本か伸び、円グラフに変わった。文字が表示され、その意味を伝える。

「人型戦闘兵器、通称 *arme* の脳には、制御と自立の比率が元から定められています。この場合の制御とは、人の命令に従つことであり、自立とは次の行動を自分で判断し、実行する事を意味します。通常はこの比率が、七対三になつています。これによつて、人としての知能を持ち自らの保全を図る上で、制御者の命令に服従します」

「ですが」と、否定形を使った。もう一つ別の円グラフが姿を現す。

「Y3562-140の場合、この比率が八対一に定まつています。つまり、命令を遂行する比率は通常よりも高くなりますが、自らを省みる事ができない。簡潔に言えば、自分を捨てる、壊れやすいものになります」

「それと、今回のことがどう関係すると言うのだ」

「この設定は、通例の *arme* とは異なる。つまり、想定外の誤差

やバグが起こりやすくなる、その原因だと思われます」

ヨウの開発者は、ずいぶんと粹な人物だったのだろう。そいつの氣まぐれのおかげで、大変な事になってしまった。だが不思議と、憎いだとかなんだとかいう感情は、セグには湧かず、そこにあるのは、やつてくれたなあという呆れと、感嘆に近い感情だけだった。さざ波のようなざわめきが充満し、かといって言葉として聞き取れるようなものは発生しない。だれも、この状態を把握し切れず、また、はつきりと責任を押し付けられるべき人間がない為の空気だった。

「分かった。整備班、今までこのことについて、気付いていた点はなかつたのか」

偉い人に矛先を向けられ、指名された整備班代表の四十半ばほどの男は、大層な驚きを隠さず、椅子から立ち上がった。動搖しそぎて、その雰囲気には怒りに近いものさえ感じられる。

「わ、我々のところでは、今まで少なくとも、疑問を抱いたことは、ありません」

「故障が多い事には気付かなかつたのか」

「点検の場合が多かつたので。異常は見受けられませんでしたし、まず民間の専門店を利用する事がほとんどだったので、故障の点は知りかねます」

「おいちよつと待て」と、あと一歩でセグは口出ししそうになつた。まさか、あそこに責任を押し付けるつもりか、そう言いそうになつたが、自分の身分はわきまえているつもりなので、なんとかその台詞を喉元で押しつぶした。

突然名指しされ、思わず背筋を伸ばしなおす。

「一番近い場所にいて、このことに違和感を感じなかつたのか」「違和感はありました」

嘘をつくつもりはない。

「しかし対処するつもりはなかつたと?」

「点検結果に問題はなかつたので」

俺も嫌な奴だなと、答えながら思う。刺すような視線を感じるが、しかし本当にそう思つていたんだから仕方がない。

「それに、先程も言いましたが、個性の一部だと思つていました」
人型戦闘兵器は、基本はどれも同じだが、一体ずつ異なつた点を幾つか有している。髪と目の色の組み合わせ、そして内面。殺人兵器に内面なにもあつたもんじやないが、簡単な受け答えに対する僅かな違い、微妙な差が生じている。

だから、ヨウのそれも、その一つだと想定していた。ほんの少し周りと違つてゐるだけ、自己保全という箇所に現れてはいるだけだと。それ以上、セグには反論する氣も訴える氣もない。

ただこの、欠陥品に対する処置の決定という名義で行なわれている責任の押し付け合いを、違う場所での出来事のように眺めていた。最終的に自分に回つてこようが、それが結果なら仕方がないという氣すらしてゐた。それすら離れたところから眺めている自分に、少し驚いていた。

窓もない小さな倉庫のような部屋、その隅に置かれた長いすに、来たときと変わらない姿勢で、ロボットは浅く座つてゐた。

「Y3562-140、起きろ」

セグが呟くと、閉じていた瞼をゆっくり開く。停止してゐた全機能が回復するまでに、十秒もかからない。ついで来るよろこびに言つて、黙つたまま立ち上がり、部屋を出た。

応急処置はしたと言つてはいたが、本当に応急だったようで、無事だつた片足に体重をかけながらアンバランス歩いてくる。感情はないし、意識もないはずだが、あまりにも必死なように見えたので、セグは歩く速度を落とした。

俺はあまいのかな。ぼんやりとそう考へながら、偏つた足音を聞いた。

雨が降り出した。ぽつりぽつりと髪を濡らしていたそれは、あつという間に激しさを増す。通りにも、人は見られない。細い雨が、地面を打つ。

霧のように景色が白みを帯び、音を奪い去つていく。天が降らせ
る雨音だけが、身体中に染み込んできた。水溜りを踏みつけ、冷た
い雨に全てをまかせ、静寂が満ちた通りを歩く。

「またお前か」

「すんません。開いてますか」

「見りやあ分かるだる」

奥から出てきた修理屋に、セグは軽く頭を下げた。

こんな雨の日に客なんか来るはずが無い。それこそ見れば分かる
のだが、ここに入り口はいつも通り開け放したままだ。どうやら、
セグたちが来ることを想定し開けていてくれたらしい。食えない親
父だ。

「また派手にやられたな」

「一応、応急処置はしてもらつたんすけど」

「とにかく奥まで来い。そこ閉めとけよ」

「了解」返事をして、セグは引き戸に手をかけた。立て付けの悪
いそれは、軋んだ音を立てながらようやく閉まる。吹き込んでいた
雨風が、戸を激しく叩く音が響いてくる。

台の周りに工具が雑然と並んでいる、車庫のような簡素な場所、
この店の目的にぴったりだ。

礼を言いながら、放られた乾いたタオルを受け取り、セグはがし
がしどづぶ濡れになつた髪をふく。台の側で、ロボットも同じ様な
事をされていた。全長百六十センチちょっとで、その修理屋よりも
低く造られている。あまり高くてもいけない。敵にとつても、自分
より背の高い相手のほうが、同情はかけにくい。これがギリギリだ。

指示された通りに、ヨウは台に上って横たわった。隅までを照らしきれない裸電球の元、その足を見下ろす修理屋が顔を顰める。

「これが応急処置だと。ただ鉄棒入れただけじゃねえか」

「そんなひどいのか」

「これじゃ無事な部分まで潰れちまう。ほんとに大丈夫なのか、軍部は」

当てのないぼやきに、小声で「わかんねえ」とセグは呟く。国軍ですら、自分の所属している場所ですら、なんだか信じられなかつた。責任を押し付けあう彼らも、軍人である自分も、汚い生き物だ。

「しようがない、やるしかねえか」

その声が、雨音に混じる。

屋根を激しく雨が打つ。こもつたその音は、テレビの砂嵐によく似ている。空の木箱に座り込み、ぼんやりとそんなことを考えていた。

「こいつの処分は、どうなつた」

ふと、修理屋が尋ねた。

「しばらく出動禁止。一ヶ月して異常が見られなかつたら、試合続行。責任問題はうやむや」

軍部に認可されている為、ある程度の情報は手に入るのだろう。生まれつきの異常があつたことも、その足は味方に破壊されたのだという事も、全部知つていてははずだ。

「こいつ、いつまで戦うんだろうな」

ぼつりとセグが呟く。

「人の脳撃ち抜かれるか、それこそ体がずたぼろの粉々になつて、再起不能だと認められるまでだな。ちょっとやそつとじやわしらは直せるし、それこそ上が許さねえだろ」

「俺、こいつには、なりたくねえな」

膝に頬杖をついて、窓の向こうの雨を眺めながら呟つたセグを、修理屋は振り返る。彼はそれに気付かない。

彼の立場にある人間は、使用可能だと認められた場合、その脳は

死後再利用される。強制であり義務だ。

「そんぐらいなら、一発で頭ぶち抜かれて死にてえよ」
本音にかぶせる乾いた笑い声。セグのそれが、虚しく空氣に霧散していく。

「大体の奴はそう思つてるだろうよ」

「だよな。うまくいけば死ねるだけ、俺はましだな」
半永久的に戦い続けなければならない、人型戦闘兵器を横目で眺める。終わりがあるだけ、自分はましだ。セグはそう言つ。

だけもし、死に切れなかつたら。こういう風になつてしまつたら。生きても死んでも、自分は人を殺し続ける。いつそれを止められるのか、だれにも分からないま。

それを否定する事は許されない。この軍服を着て銃を握り締め、人型戦闘兵器に指示を与えている時点で、許されるわけが無い。だからそれを「まかす為、本気でないと自分に言い聞かせる為、セグは軽く笑う。

「それなら、軍人なんかならなきやよかつたじやねえか」

「なつちまつたもんはしようがねえよ」

「どうしてなつたんだ、お前は」

「なんで、だろうな。ほんと」

頭にタオルをかぶつたまま、首筋をかけて考える。思い出すというより、考える。

「俺んとこ、親父が兵士だつたんだ。だからかな」

「そんなんに尊敬できる親父様だつたのか」

「いやいや。だつて俺、覚えてねえもん。ずっと前に戦死しちまつたからさ、顔も写真でしか知らねえんだ」

「じゃあ理由にならねえじやねえか」

「理由、ねえ。後付のもんでいいなら言つよ」

返事をしない修理屋を振り向き、セグは話し出す。

「俺の母親、そんな強い人間じやなくてさ、親父が死んじまつて、親として駄目んなつちまつたんだ。飯からなにから、俺と兄貴で仕

切つてた。そりゃあ、励まそと頑張つたけど、駄目だつた。一度塞ぎこむと、夜も寝ないでぼけつとしちまうの。人形みたいで何話しかけても返事しない。してもまるで的を射てない。今でも、そうなんだ」

セグは軽く首を横に振る。

「ひとりにしちゃおけないからさ、故郷くわいごには兄貴兄が残つてる。だから、俺は好きにしていいって言われたんだ」

「それで、わざわざ死に行くようなもんになつたのか」

「死ぬ氣はねえよ。でも一人も兄弟がいるのに、どっちも残つてるなんて笑えるだろ。だから体裁のためつていつたら、まだ格好もつくかな」

雨の音がいつそう激しくなる。それにかき消されことなく、セグの声は静かに空気を振るわせる。

「母親つて気はしなかつた。親がいる安心なんてなかつたし、頼れるものもなかつた。だから俺は、父親がほしかつたんじゃねえのかな。親父が死んだ場所に行けば、何かあるとでも思ったのかもな。別に何も無いつてことは分かつてたし、幻想を抱きたいとも思わねえけど。でも、俺が軍人になるつて言つたときは、止めてくれつて言われたな」

「そりゃあ、そうだろうな」

「今のポジション、一応死ににくい場所なんだ。そういう事で、なんとか頷いてくれたよ。もとから、俺らに命令するような人じゃなかつたし、さいわい自分の弱さを知つてたし」

「兄貴は、何て言つたんだ」

「自分がそうしたいんなら、そつしろつて」

セグは自分でも気付けないような笑顔をつくる。うすつぺらいそれを、自身に貼り付ける。

「そんで逃げたんだよ。俺、きつたねえだろ。母親が反論できないのをいいことにして、兄貴の優しさを利用して、逃げたんだ。居もない親父が死んだ場所に。一応親だし、泣いてたんだよな。最後

に家で過ぐした夜

「それから、家に帰つたりしたのか」

「一度も。今更どの面下げて帰れんだよ。多分さ、俺に帰る気がないってことを知つてたから、泣いてたんだと思つ」

「生きてるうちに、帰つてやれ」

顔を上げず修理屋は言った。返事もせず、セグは苦笑する。帰るべき場所がある。だけど帰れない。くだらないプライドのせいか、申し訳なさの境地の為か、分からない。しかしそれを実行するには、帰るという意思はあまりにも深いところに潜り込み過ぎていた。

不規則なリズムで、雨の音が全てを包み込む。

静寂をほどよく破つていく。

「今度、ちゃんと検査してやらんとな」

修理屋は壊れるたびに手を加えてきた、兵器を見下ろした。命があれば、何度も死ねただろう。言葉があれば、表現できる能力があれば、彼らは死にたいと言つただろうか。それとも、生きたいと言つただろうか。

雨は、止まない。

部屋に行くと、案の定カヤは泣いていた。暗い部屋の寝床で、声を殺して泣いていた。

側に寄つてそつと撫でながら、少しだけ話をして、眠るまで手を握る。小さく温かい、子どもの手。悲しみを握るには、小さすぎる。規則的な寝息が聞こえ出し、血の繋がつていない家族、アスナはゆっくり手を離した。

カヤに決定的な心の傷を与えた者。それが、見つかったのだ。先日若い兵士が連れていた人型戦闘兵器、銀髪に赤目のがれが、あれの脳の持ち主だった奴が、カヤの家族の命を奪つた。自分達にとって、憎むべき相手。

こんなに優しく幼い彼女を傷つけたそれが、彼を殺した奴が、のうのうと存在している事が、腹立たしくてならない。見つけ次第、何が何でも潰してやろうと、仲間と相談して一生懸命情報収集をしてきた。彼を使用しているかもしれない機体を探してはいたはずだが、これはこれで好都合だ。

それなのに、カヤは今になつて憎んでないと言つ。だから何もしなくていいと。

「カヤ、どうして」

アスナは小さく呟く。

一番恨んでいるはずの、傷ついているはずの彼女がそう言つのだ。どうしていいか分からぬ。

暗闇の中、床に座り込んだまま膝に顔をうづめた。

「行かないで、お願ひだから」

アスナが懇願するが、彼は困ったように笑うだけだった。

「戦つたって、殺されるかもしれないじゃない」

「そう、かもな」

「かもなって、どうこう」とよ。あんたが死んじやつたら、そしたら、カヤはどうなるの。たつた一人の家族じゃない

「もしそうなつたら、カヤのこと、頼む」

「勝手な事言わないでよ！」

あつたり言ってのけた彼に、当たるよつに怒鳴つた。腹が立つて、悲しくなつて、心中がぐちゃぐちゃでわけが分からぬ、その全てをぶつける。

だけど、彼の決心は固かつた。

「おれが帰らなかつたら、アスナがカヤの家族になつてくれ」

「……いや。嫌だ、そんなの。カヤの家族は、あんたなんだよ。その場所が私につとまるわけないじやない」

「出来るよ、だつて、ずつとおれらと一緒にいただろ」「できない」

「大丈夫だ。頼むよ、こんなこと言えるの、おまえしかいないんだ」
彼の頼みは、ちゃんと聞いてやりたい。受け入れてあげたい。いつもそう思つてゐるのに、それなのに、こんなことを言つてほしくはなかつた。受け入れる事は、彼の死の可能性を認めることを意味する。嫌だつた。死んでほしくなかつた。

アスナは、力なく首を横に振る。

「もう、いいぢやない。一緒にいよつよ。せめて、カヤの手は繋いでいてあげて」

「おれも、できればそうしてみたい」「だつたら」「だつたら」

「でも、出来ないんだ。行かないといけない」

どうしても、聞いてくれそうにない。それに、時間も残つていなかつた。悲しくて悲しくて、涙が滲む。

「どうして。カヤのこと、嫌いなの。兄妹ぢやない」

「嫌いなわけないだろ。カヤが傷つくのを見るのが、おれは一番辛

い。耐えられない」

だから、と彼は笑う。いつもと変わらない、優しい笑顔で。

「だから、戦うんだ」

我慢できなくなつたアスナの目から、涙が零れた。慌てて拭おうとするが後から後からそれは溢れてきて、ごまかすのは諦めた。彼は、自分達と同じように、まだ子どもだ。その彼がこんなことを言つているのが、悲しかつた。それ以上に、彼にそれを言わせているものが、限りなく憎い。守るために命を懸けさせる何がが、例えようもなく憎らしい。

「そんな顔すんなよ」

笑つて、彼は泣いているアスナの背を軽く叩いた。一番、辛く怖い思いで一杯なはずの彼は、笑つていた。

「また、会えるよ。な、大丈夫だから。また三人で遊べる日が、きっと来るから」

それを、平和というのだろうか。平和な世界だというのだろうか。もし、もしも戦争が終われば、再びそんな日が来るのだろうか。それとも彼が言つてているのは、会えると言つてている場所は、ここではないのだろうか。

うんうんと頷きながら、「わかつたよ」と返事をして必死でアスナは涙を拭う。いつもの強がりではない、きっと最後になるであろう彼の姿を滲ませるのが、嫌だつた。

そしてその日、彼はいなくなつた。敵兵にやられたという証言だけが残され、死んだという証拠はなく、目の前からいなくなつてしまつた。

戦争は終わらない。

あの戦闘兵器が一度死んだとき、最後に耳にした言葉。「カヤ」という単語。そいつはあの場所で、彼と同じ場所で死んだ。あいつ

が、殺したんだ。

最後の最後まで、彼はたつた一人の家族を想っていたのだ。それなのに、そんなに優しい人なのに、どうして殺されなきやならなかつたんだ。まだ子どもだったのに、自分と変わらないのに、まだ未来を信じて笑つていい頃だつたのに。彼は自分で戦う事を望んだ。優しい彼は、望まざるをえなかつた。

こんな思い、もう嫌だ。この国も、戦争も、何もかもが嫌だ。

「ごめんね」

小さく咳き、アスナはカヤの柔らかい髪に触れる。

やっぱり、私は行くよ。こんなのは理不尽だ。奪われてばかりで、カヤもたくさん泣かされた。なにも悪いことなんてしていないのに。きっと、こうしなきや何も変わらない。私はもう、前に進めない。許せない。

穏やかな寝息を聞きながら、少女をそつと抱きしめた。窓から差し込む柔らかい月明かりが、アスナの流した涙を、そつと照らしていった。

遠くで響いた爆発音。

音の真上で、雲が燃えていく。

雲から涙は降つてこない。

降つてこないから、燃え続ける。

燃え続けるのに、立ち込めるのは静寂。

誰かが呼びかける、誰かの名前。

名前の後で、燃え盛る赤い炎。

炎を消した雨の元で、聞こえる泣き声。

ああ、そうだ、あの泣き声は。

朝方、大きな爆発が起きた。

朝霧のなか、粉塵が舞い上がり、炎が薄い雲を染めた。

アスナは、向けられている銃口を精一杯睨みつける。大通りの固体面に膝をつき、無駄だと分かっていながら、顔を上げ続ける。通りがかりは遠巻きに見てているだけで、助けようとすると一人もない。当たり前のことがだが。

「重罪だと知つて、やつたんだな。人型戦闘兵器の倉庫の爆破など」というものを」

幾人かの軍人が、彼女の前に並んで向かい合い、銃を構えている。そのうちの一人、きっと彼らの上司である男が、問いかけた。

アスナは、黙つたまま彼から視線を離さない。外せば、あまりにも自分が惨めだったし、これ以上に抵抗する術も思いつかなかつた。「おかげで一体が駄目になつたらしいが、これは大きな痛手だ。何

故国を裏切る真似をしたんだ、ん？

「裏切りなんかじゃない。元から信じてなんていない」

押し殺した声に出来る限りの憎しみを込める。

「そうかそうか。そういう見解もあるのか。市民がそいつ想つのなら、我々が何のために戦つてのかも分からなくなるな」

「なら、戦わなければいいんだ。そうしたら、必要以上に誰かが死ぬ事もなくなるのに」

「なにを今更」

男は、蔑むような哀れむような目で、彼女を見下ろした。相対する瞳は、この状況を省みず、狼のように鋭い。

「そういえば、君らが望んでいるものがあつたようだが」

厳しく表情を縛り付けていた彼女の顔が、懐かしい名を聞き、一度だけはつと緩められる。最も望んでいた名前を、確かにアスナは耳にした。

「どこに……」

「使つていたのだがね、兵器として。だがもともと死に掛けていたものだ、負荷に耐え切れずすぐに駄目になつたよ。意外と難しい技術なんだぞ、これは」

急激な怒りに、アスナは奥歯を噛み締めた。相手が誰であつても何であつても、彼を、彼の死を馬鹿にすることだけは、彼女にとつて許されないことだった。彼に對して残酷すぎる。だが、自分ももう直ぐそつちにいく、それで許してくれと、彼女は胸中で語りかける。

「まあいい、どんな理由があるつと、どうせ処刑だ。今ここで行なつても何の問題もないだろ」

男の隣にいる兵士が、一步踏み出した。アスナに向けられる、無機質な拳銃。

覚悟はしていた。だから、彼女は懸命に相手を睨み続ける。

周囲のざわめきも、すでに意識の内には入つてこない。

「見せしめだ」

「アスナ！」

高い子どもの声が、男のものに被る。

小さな隻腕の子どもが、人だかりから這い出して、アスナに駆け寄る。そのままの勢いで、血の繋がらない家族に抱きついた。

「カヤ！ どうして」

「いや、アスナ、死なないで。お願ひ、もう一人にしないで」
アスナに抱きつき、横にへたり込んだまま、カヤが懇願する。心の底からの言葉が、アスナの決心を大きく揺るがし、ないものにしていく。

「ごめんね、カヤ」

彼女の体温を感じ、涙に触れて、今まで無視していた後悔が、急速にアスナの心に湧き上がる。全力で自分を頼ってくれる彼女をおいていくのが、唯一の心残りであり、巨大な心苦しさだった。しかし、それを差し引いてでもの決意だったはず。

それなのに、今になつて、彼女の手を離したくなくなつた。

自分の不甲斐なさ、自分勝手さを噛み締めるアスナを、カヤは潤んだ瞳で見上げる。

「アスナ、死んじやうの」

答える代わりに、一度頷く。

「それなら私も、一緒にいる」

「カヤ……」

「一緒に、兄ちゃんのとこにいこう。もう、一人で待つのは、いやだよ」

言葉を失つて、アスナは少女を見下ろした。

カヤの為の、敵討ちはずだつた。彼女が一番憎んでいるはずのものをなくそと、努力してきたのだ。だけど本当は、誰のためだつたのだろう。自分が、彼を失った事実を見つめきれずに、こんな方向に向かつて「まかしていたのじやないだろうか。全部、自分の為だつたのだろうか。

「ごめんね、ごめんね」

彼とは、カヤを守ると約束したのに、結局は自分の死に彼女を巻

き込んでしまう。こんな台詞を言わせている。最大の悲しみを、自分が彼女に施そうとしているのだ。死んでほしくないのに。例え、未来に暗闇しか見いだせなくとも、誰もいなくなつても、カヤだけには生きていて欲しいのに。

アスナは、カヤを抱きしめる。強く、優しく。せめてもの慰めに、そつと彼女を背中にかばう。

「どうして、あいつが」

息を切らしながら、セグは全力で人だかりへ駆けた。仲間の側まで来て、銃を向けられている彼女を見て、啞然と呟いた。

彼女が、国軍の主力になつていて戦闘兵器を破壊しようとしたのだ。さいわい、ヨウは最終点検の為に戻つていなかつたため、無事だつた。今も隣で、指示を待つていてる。

「あの子は」

確かに力ヤと呼ばれていた子ビも。その子が、彼女の背にかばわれている。あの子も殺されるのだろうか。

これはただのみせしめだ。あんなことをすればこうなりますよと。いう、公衆の面前で罪人を処刑するという、民衆に歪んだ正義を押し付けるには恰好の手段。

まだ全てをよく飲み込めないまま、セグは前の方で銃を構える仲間を振り返つた。機械のように無機質に、彼は相手を見据えている。その無感情さは、いつも見ている赤い瞳によく似ている気がした。

引き金に指がかかる。

赤い瞳に、それが映る。

人が、人をかばう姿。

乾いた発砲音がこだました。

空を向いた拳銃から、細い煙が立ち上り、虚空に消えていった。首に刃の突き刺さった身体から、命が消えていく。

「うそだろ……」

かすれた消え入りそうな声で、セグが呟いたが、その言葉は自身の耳にも入つてこなかつた。

腕に映えた刃を味方から引き抜き、人型戦闘兵器はゆっくりと、返り血で汚れた顔を上げる。心のない瞳が、本来の味方たちを捉える。

「ど、どうなつているんだ」

これが見せしめであると宣言した男が、驚愕に満ちた声を発した。

「おい、セグ、なんだよこれ」

「わからねえ」

仲間に声をかけられるが、セグにも何も分からぬ。誰よりも呆然として、それを見ている。

「これ、あの異常があつたやつだろ」

「なにやつてんだ、止める、今すぐ！」

誰かの咳きに、男が声を荒げた。

「ヨウ、止める、止まれ！」

セグは怒鳴つた。どういうつもりなのかは知らないが、それ以上に対処方法が見つからない。

これで十分なはずだった。

「お、おい

仲間が焦りを露にする。

ヨウは膝を折つて屈むと、そこに落ちていたものを左手で拾い上げる。先ほど空を貫いた拳銃が、その手に握られている。

人型戦闘兵器に、銃器の使い方がプログラムされていないのは、

まさにこういう場合を想定しての事だった。戦う為の彼らが更に兵器などを使用すれば、あまりにも強すぎる。もし、ありえないことが、もしも暴走が起きてしまった場合、だれにも止められなくなってしまうからだ。学習能力の中からも外されているから、見て覚えるといつとも不可能なはずだ。

インカムを使えば、空気を介さず、直接脳内に指令を下す事ができる。出来る限り素早く、セグがそれを装着している間に、ヨウも行動を起こしていた。

左手に握った拳銃をすっと前へ向け、右手首を押し当てて固定する。両手で構えたほうが確実なはずなのに、手はだらりとたれたまま。それに、基本的に彼らは咄嗟に右手が出るよう、つまり右利きであると設定されている。なのに何故左手に握っているんだ。セグは一瞬考えたが、今の状況を踏まえれば、そんなことどうでもいい。

引き金に、ロボットの指がかかつた。

「Y 3 5 6 2 - 1 4 0、止める！ 止まれ！」

ビクリとその手が震え、ヨウはセグの方を振り向いた。引き金を引かずにはすんだが、動きは停止していない。正式名称を呼んだ上で、止まれと命じたはずなのに。

「撃て！」

男の声が乱雑に響き、銃声がどろぐ。

人ならば完全に相手を息絶えさせる量の銃弾が、機械の体に集中する。

部品が弾け飛び、装甲が剥がれ落ち、折角直したばかりの足に穴が開く。殺人兵器の身体がよろめいたが、ほぼ骨組みだけになってしまった右足を踏ん張り、まだ立っている。

再び、引き金に指が。

「駄目だ、ヨウ、撃つな！」

またしてもその行動は制限され、銃弾の雨にさらされながら、ヨウは自分の担当者を振り向いた。

どうして、と光のない瞳が訴えている。その間にも、身体は崩れていいく。

ぐぐもつた呻き声が聞こえた。ヨウの後方にいたアスナの、流れ弾に貫かれた足から血が流れている。それでも、前に出ようとすると力ヤを、彼女はなんとか押しとどめている。

「かばつてるのか」

セグは小さく呟いた。

アスナと力ヤの前に立ち塞がり、彼らの死を遠ざけているのだろうか。しかしどうして、そんな命ぜられてもいいことを。このままで、確実にやられるのに。

ただみせしめの為に一般人を殺す軍人と、その一般人を庇うロボット。どちらが人間なのか、もうセグには分からなかつた。ただ、ヨウのしていることが間違つてなどいないことだけは、確かだと思った。

じゃあ、どうして俺は止めろなんて言つているのだろう。止まれなんて言つているのだろう。あれが止まれば、彼女達は確実に死ぬのに。理不尽に傷つき続けた彼女達が、死ぬのだというのに。

それでも、セグは言わなければならぬ。彼は、悲しいことに軍人だつた。

「Y3562-140、止まれ！」

叫ぶと同時に、一発に顔をかすられた機械の身体が地面にくずされた。

あちこちから金属が覗いている。普段は人と区別のつかない身体だから、それがロボットであることが一層強く表されていた。

ぼろぼろだつた。命があれば、何度死んでいるだろう。だがこれならまだ、修理も可能だ、頭への銃撃はなされていない。直され、きつと今度は脳の方も修正がなされ、より人間を失つて人を殺し続けるだろう。

セグは急に、ヨウを撃ちたくなつた。その頭をふつ飛ばし、人の脳を失わせ、一度と使えないようにしたかった。だが彼にはそれが

許されない。自然に銃を握りつとする右手を抑えるのは、なかなか困難だった。

ひとときの静寂が訪れる。もはや制御不可能に陥っている人型戦闘兵器を前にし、誰もが銃を向けたまま命を惜しんでいる。

「動かない、のか」

隣にいる仲間が、ひとりごとのようにセグに訪ねた。その顔は酷くこわばっている。

「さあ、な。だけど、ヨウは、まだ」

殺人兵器の正面にいるひとりが、きっと自身でも予期していなかつたような声を上げた。

名前に反応したのだろうか。機械の腕が地面を掴んでいる。ところどころにしか人工皮膚の残つていない腕を、地面に押し付ける。あそこまで壊れれば、自己保全の為に無理に戦おうとはしなくなる。無理だ。これ以上動けば、崩れてしまう。

だが、ヨウは徐々に身を起こしていく。いつ伏せだつたのが、持ち上がり、上体が起きる。部品が、その身体から幾つも幾つも転げ落ちていく。壊れながら、ロボットは立ち上がっていく。

「うおおああ！」

そして、叫んだ。セグも初めて聞いた、Y3562-140の大声だった。

崩れかけながらも、ヨウは立ち上がった。

片頬が剥がれ中の機械が見えている、その姿は、凄惨だ。

「おまえは、いつたい」

思わず呟いたセグの言葉は、インカムを通じて届いたようで、赤い瞳が彼の方を向いた。真っ直ぐに視線が交差する。

小さな家の、床は固めた土で出来ている。その暗い部屋の片隅に小さな子どもがしゃがみ込んでいる。右手の細い指で土を搔き、絵でも描いて遊んでいるようだ。その側には、茶色の薄汚れた中型の犬が伏せている。窓から差し込む光が、その犬と子どもを暖めている。

静かな、どこか懐かしいような光景だった。その小さな空間には、世界に蔓延する悲しさとか苦しさなどは入り込まない、穏やかさだけが満ちている。

静かで、時間の流れも感じない。

突然、外に繋がっている木の扉が、勢いよく開いた。

「シノ！」

叫びながら、長い黒髪の若い女が外から飛び込んでくる。

「よかつた。ここにいた」

安堵を明確に表しながら、振り向いた子どもを一度抱きしめる。が、その身体からは焦燥が滲み出でていて、慌しく彼女はその腕を離した。犬がぴくりと耳を震わせ、凶暴な唸り声を上げだした。

「いい、大丈夫だから、言う事きいててね」

側の壁の付け根に、穴が開いていた。そこに腕を差し込んで、中に入つていた壺や箱を取り出し、床においていく。

「ちょっとだけ、ここに入つてなさい。大丈夫だから」

空になつた穴を指していった。不思議そうな顔をしながらも、シノと呼ばれた子どもは頷いて近づいていき、片足を入れながら振り向いた。

「あつ」

声を上げると同時に、犬が二度三度と吠え、開け放たれた扉から、外へ飛び出していった。

名残惜しそうにそれを見ながら、小さな穴に身体を納める。底が、

床よりほんの僅かばかり低く、狭い視界から部屋の様子が少しだけ見て取れる。

窓から、悲鳴が流れ込んできた。かん高い女の悲鳴だ。

男の怒鳴り声。一人や二人じゃない。大勢いる。

恐怖に満ちた叫び声に、怒りに彩られた大声。

たくさんの足音、物音。

そして、銃声。何度も何度も。断末魔の声が上がる。

泣き声が聞こえる。銃声が響く。泣き声が止む。

不安を限りなく広げる喧騒。

途端、部屋の扉が蹴破られ、怒鳴り声と共に荒々しい足音がなだれ込んできた。

女が、穴を塞ぐように背を押し付け、座り込んでいる。よくは見えないが、男の太い声が隙間から転げてくる。言葉までは聞き取れないが、明らかに見下げている、声。

女がなにごとか叫んだ。逃げようとはしなかつた。

銃声が響き、彼女の声が聞こえなくなる。一度、二度、三度。六度目で、細い身体がゆっくりと横へ傾き、動かなくなつた。

穴の中へ、液体が流れ込んでくる。外の光に照らされるそれは、赤い。女の身体から流れてきた血が、穴の底を浸していった。狭すぎてろくに体勢も変えられない子どもにも血は流れ、腕が、足が、自身のものでない血で赤く染まっていく。

子どもは、何も言わなかつた。叫びも泣きもせず、座り込んだまま、ただじつと赤に染められる。

物の割れる音、落ちる音、野太い声。それらは一通り充満すると、嵐のように去つていった。

何も聞こえない。耳の痛くなるような静寂が、唐突に訪れる。

やがて、子どもはなんとか穴から這い出し、血だらけのままで、倒れている女を見下ろす。彼女は薄く目を開いているが、その胸にも足にも銃弾が突き刺さり、未だに細く血を流し続けている。

その側に、子どもがしゃがみ込み、顔を覗き込んだ。一度と自分

を抱きしめてくれない腕に、そつと触れた。その子は泣いてない、全てがあまりにも唐突過ぎたのだ。

「おかあさん」

かすれた、細く小さな声で、女に呼びかける。だが、母親からの返事はない。

「おかあさん」

もう一度呟く。

女の「こつた瞳」が微かに動き、乾ききつた唇が、僅かに震えた。しかし、命をはつて守つた息子の姿すらもその瞳は映せず、自分を呼ぶ言葉へも、答える声は出ない。

轟音が静寂を引き裂き、奥の扉が、弾けとんだ。その中から、炎が飛び出す。敵兵は、火までかけていったらしい。炎はあつという間に、全てを包み込もうとその手を広げていく。

「にげよう」

子どもが、母親の手を掴み、引っ張った。しかし、いくら彼女の身体が細くても、引き摺つて逃げるには、その子は幼すぎた。視界が煙に覆われだし、景色が白みを帯びていく。出入り口までの短い距離を、少しづつ、精一杯子どもは詰めていく。

焼けた天井が崩れだし、あちこちの床に、炎が突き刺さった。外へ繋がる扉が、火を帯びる。音を立てて燃えていく。目の前で焼けていくそれを、子どもはぼんやりと見つめる。

あと数歩進んでいたら自分を焼いていた炎。

緩慢に視線をめぐらせ、目に留まったのが、開けっ放しの窓。時間の問題だが、まだ焼けてはいない。逃げ場はもう、そこ一つしかない。

子どもは、母親を見下ろした。どんなに頑張つても、窓枠へ彼女を引き上げる力はなさそうだった。

「にげ、て」

かろうじて聞き取れる、かすれた声。

いやいやと子どもは首を横に振る。まだ命の繋がっている母親の

側に、膝をつく。

「いやだよ。一緒に、にげよ！」

そうは言つが、彼女が自力で起き上がりてくれなければ、どうする
こともできない。

「おかあさん、大丈夫だつて、言つたよ」

その声が、湿つていく。その子は、このままではもう死ぬしかない
自分達を悟つたのだ。炎に呑まれる恐怖や悲しみに支配され、その
目に涙が滲んでいく。

炎の塊が、崩れる家の破片が、落下する。

子どもが、声を上げた。その腕をかすめて落ちた破片が、側に落
ちている。破片から突き出た釘の先に、鮮血が纏わりついている。

血の流れる右手首を押さえながら、尚も母親に取りすがる。

「……おねが、逃、げ」

弱々しい声が、訴える。女の口の端から血が垂れていき、炎に照ら
される肌は血の氣を失い真っ白になつていて。とつくに、身体が限
界を迎えているのは明らかだつた。我が子を逃がそうとする氣力だ
けが、からうじて彼女に声を出させていた。

「いやだよ。ぼくも一緒にいる」

「逃げ、なさい」

「いやあ。おかあさんが死ぬんなら、ぼくも死ぬ」

子どもらしき大きな黒い瞳から、ぽろぽろと涙が溢れた。死を望んで
いる子どもが、泣いていた。

「逃げなさい！」

はつと息を詰まらせると、同時に涙も止まつた。潤んだ目を見開い
て、母親を見下ろす。相変わらず、その瞳は自分を見てくれていな
い、何も映つていない。

だが、一生懸命、その子は首を振つて食い下がる。

「なにしてるの、早く、行きなさい」

「でも……」

「早く……」

氣圧され、子どもは立ち上がった。窓の方へ向かいながらも、視線は外さないまま。低い窓枠に手をかけて、尚、足を止めて迷っている。その目から、涙が零れる。

再び急かされ、枠をよじ登り、外へ出た。

背後で大きな音がして、振り返る。

炎の塊が落下し、母親の姿が見えなくなるところだつた。

「おかあさん！」

絶叫し、家の中に身を乗り出す。だが、吹き上がる炎に、思わず身を引いた。

田の前で、全てを、炎が包み込んだ。

小さな村の、どの家屋も燃えていて、あちこちに血だらけの死体が転がっている。ある者は頭を飛ばされ、ある者は身体中に銃弾を埋め込んで。

足跡のついたやけに平たい赤ん坊が転がっている。炎に半身を突つ込んだままの若い男がいる。頭部から血を流している老婆が、壁にもたれかかっている。白い壁に、まるで赤い花でも描いたかのような模様。誰一人として息をしていない。

火が空気を焼き、天を焦がす音だけが、空気を震わせていた。全てが、炎と血で赤く染められていた。命のない地を歩く微かな足音も、死を運ぶ業火の音にかき消される。

彷徨する、煤で黒く汚れた小さな足が、ふと止まつた。側に倒れている男の死体を、子どもはじっと眺める。それは、背を真っ赤にし、右手を精一杯前に伸ばしたまま、うつ伏せで地に伏している。その手の先へ、視線を移した。

ふらふらと子どもが近寄つていく乾いた地に、少女が転がつていた。胸を真っ赤に染めた左腕に、誰かを強く抱きしめている。見下ろしている子どもよりも大きく、少女よりも小さな少年。彼女が庇

つた事は一目瞭然だが、彼のこめかみからも赤い線が引かれており、身体はぴくりとも動かなかつた。

彼女の手から零れた血が、地面に血溜まりを作つてゐる。これ以上ない、酷い傷だ。なんせ、その手首から先はないのだ。

やがて、子どもはゆっくりと顔を上げ、少し離れた場所に飛んでいる手首の元へ足を向けた。細く綺麗な指をした右手。近くに跪き、自分の右手を伸ばして拾おうとする。

だけど、どうしてだか拾えない。触れられても、手は、指は、動かない。掘む事が出来ないようだつた。

仕方なく、左手で少女の右手を持ち上げ、握り締めたまま持ち主の元へ戻つた。垂れ下がつた右手首の端に千切れた手を押し当て、元の形を作る。だが、手を離すとすぐにそれは転がつて、別のものになつてしまつ。

繫がらない手を何とか繫げようと、しばらく頑張つてゐたが、やがて、子どもはその手を彼女の右腕の側に置いた。元の位置に出来るだけ近づくように、そつと置いた。

やがて、炎は消えた。

今にも雨が降りだしそうな灰色の空の真下、くすぶる瓦礫の上に、子どもは膝をついた。

側には、茶色い薄汚れた犬が横たわつてゐる。むきだした歯茎から伸びる牙には、小さな穴の隙間から見た軍服と同じ、群青色の布が突き刺さつたままだ。荒々しい獸の目が見開かれているが、その潰れた腹には必要以上の銃弾が撃ち込まれ、足跡が泥になつて毛にこびりついている。

戦つた。この犬は、戦つたのだ。敵を噛み千切り、撃たれ、踏み潰されたのだ。

汚れた細い腕を回し、冷たいはずの犬をその子は抱きしめる。一

人と一匹についた血と煤と泥が、互いを汚す。それでも、小さな体には余る犬を抱きしめ、しなやかさを失い硬くなつた毛皮に顔を埋めた。

ぱつりぱつりと、水滴が地を打ち出した頃、ようやく顔を上げた。その雨は、まるで、無慈悲で無関心なカミサマとかいうものが、見たくない穢れを洗い流してしまおうとしているようだ。ひとりぱつちの命など、その崇高な目には、見えていないようだつた。

だから、その泣き声もきつと聞こえてなどいないのでだろう。動かない犬を抱きしめたまま、天を仰いでその子は泣いた。それしか出来る事はないのだと、うとうに。それでも、絶望的な悲しみをせめて代弁しようという泣き声さえ、激しさを増す雨音にかき消されていく。涙さえ、雨に混じつて頬を伝つていく。だれにも届かない。だれも、抱きしめてはくれない。温かさなど、どこにも存在しない。

雨は、降り続ける。

赤い瞳が、一瞬で全てを教えてくれた。彼の持っている記憶を、全て伝えてくれた。

「そうか、そうだったんだな。セグは声に出さずに呟いた。

あの子は、一瞬で何もかもを失ってしまった。家族も故郷も未来も。後に、子どもは自国の軍に拾われた。未来など、あるはずはない。年相応に愛してくれる人も、いるわけがない。

子どもは少年になり、同時に少年兵になり、人を殺しだした。右手の使えない彼は、手首を押し当てて銃を固定する技術を、習得しなければならなかつた。そして、まだセグよりも若い頃、自分より僅かばかり年下の敵国の少年を、銃で撃ち殺した。だが、殺せたと思つていた瀕死の少年に、背を刺され、致命傷を負い、地に伏したのだ。消え行く意識の中、死という絶対的な恐怖の中、少年が自身の妹を呼ぶ声を聞きながら、彼は目を閉じた。

それで、死ねていたはずだつた。もう、人を殺すこと、孤独に耐えて息をする必要も無いはずだつた。永遠の安寧を得る為には、十分すぎる代価を彼は支払つていた。

それなのに。この国で、この時代で死んだばかりに、都合よく彼は再利用された。自分から全てを奪い去つた者たちに引きずり込まれ、かつての仲間を、半永久的に殺し続けるという不条理を与えられて。

ひどいよな。こんなのは、ひどすぎる。セグの瞳に、ぼろぼろになつて銃を構える姿が映し出される。

「ヨウじゃない」

彼が呟く。

「おれは、シノだ」

そのひとことが、空気を介するよりも確実に、インカムから伝わつてくる。ヨウの声で、シノが自身を示している。

セグは思つ。あの子どもは、自分よりもたくさんの中を失い、たくさん戦場に赴き、たくさん人を殺し、大人になりきれずに死んだ。どうして、あの子が、こんなことをしなければならないのだ。雨に打たれながら、動かない犬を抱きしめて泣いていた子が。あんなに弱くて、傷ついていた子どもが。今どうして、機械の体で、銃を構えているのだろう。

「どうして……」

ひとりごとの端から、自身でも気付かない涙が一筋だけ、セグの頬を滑つた。

一度だけ、一瞬だけ、シノの記憶の中で見たものが蘇る。明るい生きた村を、家族が歩いている情景。

小さな兄弟が跳ね回り、父親と笑いながらふざけあつてゐる。側で、兄弟の姉が、呆れながらも笑つてゐる。後ろをついて歩きながら、幸せそうに微笑んでいる母親。そして、彼らの周りを駆け回る人懐っこい茶色の犬。

どこにでもありそだが、なにものにも代えがたい幸せ。もう一度とあり得ない幸せ。

どうして、そんな小さな幸せが存在できないのか。理不尽に奪われてしまうのか。

何故、あんなに小さな子どもが、母親と共に死ぬことを望まなければいけなかつたのか。炎に包まれ、焼け死んでいたほうがまだよかつたなどと、思わせるのか。

そう考へると、今現在、彼が銃を構えているのは、セグには当たり前のように思われる。自分達は、今までどれだけの未来を奪つてきたのだろう。死を奪つてきたのだろう。それならば、彼に世界の不条理を代弁してもらつて、殺されるべきなんぢやないだろうか。こんな技術を作り出した自分たちが死ぬのは、当たり前なんぢやないだろうか。せめて死んで許しを請うべきぢやないか。

そう思つた。

セグは確かに、そう思つた。

だけど彼は、悲しいことに、軍人だった。

「ごめんな。……シノ、ごめんな」

せめてもの、到底吊り合はずのない謝罪を、心から。

そして、いつもの言葉を口にする。

「Y3562-140。止まれ」

直接脳に響いたそれは、彼の動きを全力で制御し始める。

シノは、引き金を引けなかつた。ヨウが、彼を縛り付けるものが、許さなかつた。

罪悪感だろうか、もしさうだとしたら、それを通り越すほどの何かで、白く澄んでしまつたセグの中に、言葉がこだまする。

「どうして」

赤い瞳が、こちらを捉えていた。不思議そうな顔に奥歯を噛み締め、言葉を噛み締める。からうじて絞り出した声が、最後の問いかけになつた。

「おまえは、シノは、どうしたいんだ」

彼が望むもの。全てを奪われた子どもが。人を殺し殺された少年が。かつての仲間を殺し続ける殺人兵器が。ヨウが、そしてシノが、誰にも知られなかつた心を、告げた。

人など、殺したくなかった。殺されたくなかった。奪われたくなかった。奪いたくなかった。

願いは、ただ、ひとつだけ。

「かえりたい」

全てがあつた、温かい全てがあつた、あの場所へ。裕福ではなかつたかもしないが、幸せだつた、小さな世界へ。

ひとつずつ銃弾が、こめかみを正確に打ち抜いた。

赤い血が、空中へ飛散した。

小さな音を立てて、機械の体が倒れていつた。

「大丈夫だ、しつかりしろ！」

「何やつてんだ、医者いねえのか、医者！」

大声が響きだし、血を流すアスナの元に、人だかりが発生する。彼女の仲間、それに同意する取り巻きたちが集まりだしたのだ。彼女に近づけなくなつたカヤの目にも、見知つた顔が映りこみ、口々に何か話しかけてくる。

アスナは大丈夫みたいだ、もうすぐ病院に連れて行つてもらえる。そう確信を持つたカヤは、人垣を抜け出した。

「危ない、こつちに戻りなさい」

後ろから聞きなれた声が聞こえてくるが、カヤは返事をせずに、彼らから離れていく。

人間である彼女たちには、口々に声をかけて心配してくれる人たちがいる。不安げな目で見つめ、励ましてくれる人がいる。だからカヤは、そこを離れた。

誰も心配してくれない、近づいてもくれない彼の側に、膝をつく。機械にはありえないはずの赤い血が流れている。唯一残された人間の脳が、鉛玉によつて的確に貫かれたのだ。固い地面に押し付けた側頭部から流れるそれが、じわじわと広がつていつている。虚ろな赤い目は、うつすらと開かれたままだつた。

カヤは、そつとその頬に触れた。体温維持装置などとつくりに壊れてしまつた肌は、驚くほど冷たい。何故立つていられたのか不思議なほど、その体は崩れかけていて、人間離れしている。

未だに固く拳銃を握り締めている手の指を、一本一本広げると、彼女はそれを手から離してやつた。

「もう、こんなもの、いらないよ」

少し離れたところに置きながら話しかける。返事はない。

ぱたりと、硬い頬の上に、零が落ちた。「ごめんね」とそれを拭い、彼女は涙を零す自分の目に袖を当てる。

血を流す頭が僅かに動き、不思議そうに、泣いているカヤを見上げた。

「ありがとう」

彼女は優しく、その腕に触れる。

滲んだ景色の向こう、微かに彼が笑ったような気がした。

ゆっくり閉じられた瞼は、一度と開く事はなかつた。

「おい、それ、それ降ろしてくれや」

「これが」

「違う、右のやつだ、右」

「ああこいつちか」

言いながら、セグは店先の棚の上へと手を伸ばし、抱えるほどの箱を引っ張り出す。想像以上に重い。足に落とせば指の一本や一本折れるんじゃないかと思いながら、慎重に床に降ろした。はあと溜め息をつく彼に、修理屋が声をかける。

「軍部つつーのは、解体されるのか」

「それが問題なんだ。進行形でめちゃくちゃもめてる」

元々、人型戦闘兵器を製造する事への反感は募っていた。軍事国家ということで水面下に潜められていたそれらが、ついに水上へ溢れ出してきたのだ。市民を取り締まるというみせしめが、結局こんな形へひっくり返され、軍部の存続から見直されている。

「ロボットが使えないんじゃ勝ち目なんてないし、白旗でも振るんかな」

その危険性が国中に広がり、国民の信用も得られなくなってしまった。いくら軍事国家とはいえ、国は人が集まつて成り立っている。人型戦闘兵器の製造はストップされ、復興の日途は今後一切たつてない。

もしかしたら、この戦争から手を退くのかもしれないことは、子どもでも想像に難くなかった。

そうすれば、この国がいつたいどうなつてしまふのかは、誰にも分からぬが、これ以上の殊勝な選択はないはずだ。

「なんだこれ、異常に数多くねえか」

戸棚に分けられて入っている部品を眺め、セグが目を見張る。一種類の部品の数だけが、他のものの三倍はありそうだ。

「阿呆。よく見ろ」

呆れた声に、紙がはられている部品を一つ指でつまみ、書かれている文字を読んでいく。すぐに、なるほどと納得した。

「一個だけ、もらつていいか」

「欲しけりや全部やる。どうせ、溶かしてつくりえるだけだからな」

「いいよ、一個で。……いや、一個。俺失くしそうだしな」
自分の性格は、自分がよく知っている。だから、セグはもうひとつだけそれを取り出して、棚を閉めた。

あのときどうして、ヨウは。いやシノは、一人を庇つたのか。似ていたのだ。母親が自分を背にかばつたときと、彼女、アスナが力ヤを守つていた姿が。つまり、人が人を守るつとする姿。そう簡単には死ねなくなつた彼は、今度は自分が守ろうとしたんじやないだろうか。セグはそう思う。

他の理由があるのかもしれないが、今はもつ知る術はない。

修理屋には、その考察まで告げた。そして、あのとき教えられた記憶を、誰よりも細かく伝えておいた。死んだ人間は誰かの記憶の中でしか生きられない、もう一人ぐらい、彼のことを知つていてもいいんじゃないかと思つたのだ。

期待通り、セグの考えを馬鹿にする「ともなく、言つたことをそのまま受け止めてくれた。

「お前は、これからどうするんだ」

「どうすっかなあ。本氣で解体つてことになつたらどうなんだろな。まあ、そんときやどうにかなるだろ」

極めて楽観的に笑いながら言つた。今は、この気楽さが重要なのだ。

「帰ろうかな、一度だけ」

「帰れ帰れ、そんで殴られてこい」

予想外の言葉に、彼の方を振り向いた修理屋は、にやりとしながら言つた。「殴られたくはねえよ」少々照れくさそうに、セグは答える。

かえりたいと言つた者に、帰る場所はなかつた。それなのに自分がどうだ、帰る場所があるのに、それを望まれてゐるのに、帰つてやらないということは。だから、帰るということは、自分がなによりも先にしなければならない事のように思える。

続いていた曇り空が嘘のように、今日の空は高い。青々とした空色が、どこまでも広がつてゐる。

視線を外すと、通りの向こうに、茶色の髪をした女が、少女と並んで歩いているのが見える。嬉しそうに少女は、何かを語りかけていた。その頭を愛おしそうに、女が撫でてゐる。

雲ひとつない空の下、人のつくる声が、温かさが、惜しみなく溢れていた。自分の故郷にもこの空が広がつてゐるのだろうかと、セグはどこか安心感を覚えながら見上げる。

この争いで、たくさん的人が傷つき、途方もない悲しみと憎しみを抱いてゐる。それら全てがなくなるまで、どれだけの時が必要なのだろう。いや、完全に消滅する日なんて、来るのだろうか。

雨は、全ての人に降り注ぐ。時期や量は違えど、誰しも必然的に、その冷たい雨を浴びていく。ぬかるんだ地面も、すぐには乾かない。だが、雨はいつか止む。晴れ間が訪れ、日差しがその身を温める日は必ずやって来る。この空は、そうしてやってきた青空。六十年振りに訪れた、晴れ間のようだつた。

国境も、時代すらも越える空は、そこに広がつてゐる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2545c/>

arme

2010年10月11日03時15分発行